日光邯鄲枕

へ13
1163

序

歴代百十四世の帝　東山院の御宇元禄宝永の比当時武将　常憲院殿
綱吉公の寵臣松平美濃守（始の名ハ柳沢出羽守保明）吉保一味徒党の佞侯難を従し
叛逆の企事既に危急なりし処に御舎弟　浄光院殿松平の天下の断絶
せんとすと歎しことかひぬ故に執事の職井伊掃部頭直興の諫言に因て甲府
家宣公を御代と升し天下泰平に治りぬと斗咲及ひしなきしても密事の成
り故に民間の噂ハ委細の様を知ける人稀之世に日光邯鄲の枕と題して紙
数僅に十二三紙斗の書あり有右の荒増を記ししるしハ云へ尤他見を憚りし
故にや諸侯並の御名ハ白備用捨難多して実義を記さん爲壮年の比
ハ関東の彦根の藩と井伊家の微禄を喰んで勤仕せし御の事成故甚子細を
粗相知てり此記親しき遊客の所望せるに依て彼写本を詞の綾しし従しう
た彼是を品ひ綴けかし　増補日光邯鄲の枕と題し上中下の三巻となし
然るに百二三十紙と稱しぬ今序を抜き親み之事ハ斟酌有へきとの心

浪華隠士

能可蔵誌

寛延第三庚午年孟生

日光邦鄭桃目流
矢木主税家霊夏す
松平天下第剣ことす
石清水八幡宮御詑宣ことす
井伊掃部頭ハ家ヲ巡スす
上野ニ御光駕ニ御觸并本庄家来也ことす
柳沢保忠父子白狐ニ神ヲ祈ルす
同孫右衛切賣伊蕃ニ射談ことす
占師雲洞柳沢孫右衛ヲ相スルす
将軍家上野御光駕御苑見ことす
柳沢孫右衛保明立身ことす
将軍綱吉公戸田川御鷹狩ことす
為儲(ミヤウケル)御嗣矢木主税奉進女色す
紀足院會海行晴天す
綱吉公始テ柳沢ヲ亭ニ御成ことす

中之巻
柳沢出羽守ニ随従ニ業立身并護持院僧正ことす
柳沢ヲ女子代娘死去ことす
柳沢万手代娘ヲ為養女す
小山田孫市重科不穿鑿ことす
五十二僧権威并将軍ヲ奉誣(シカシ)す
万民困窮并生類御憐ことす
御大医者ことす
天下悟矣并富士山焼す
柳沢出羽守従一体ノ大名す
矢木主税諫云并改易ことす
将軍家御養思内評定ことす
甲府綱豊卿ヲ咒咀ス并根津権現ことす
甲府家定卿西ノ丸ニ入御ことす
松平西湖守吉保計畧ことす

下巻

井伊掃部頭直興謀略ニ事
不礼講并林大学頭文談ニ事
護持院僧正酒井雅楽頭偽(スカヌ)奇事
綱吉公御病悩并家宣卿護持院ニ御成ニ事
勇猛者吉保家宣卿招請ニ事
井伊直興大老職御免ニ事
井伊直興御臺所ニ御殿ニ来ル事
御臺所綱吉公御女抱ニ事
酒井雅楽頭發明并綱吉公御薨去ニ事
御臺所御薨去ニ事
常憲院殿御葬送并増上寺大衆騒動ニ事
家宣公御治世并政事始ニ事
井伊直興勇猛者吉保ニ諫云ニ事
柳沢家臣吉田佐太郎吉保ヲ諫ル事

伊勢守吉里柳沢ニ家督ヲ継事
将軍家宣公任官宣下并矢木主税蔓延ル事
月蔵軍

日光邦郭梅巻之上

矢木主税蔓延事

梅檀ハ二葉より香ハし頻伽鳥ハ印(タマゴ)の内より其声をなると云り夫素性を慮て勇有しといへ共匹夫に勇を大名に信病有内大臣宗堅公ハ平家の棟梁成といへ共心信志なふて八潟にて生捕き縁会に引ちされて軍勢なく射留しなふ時捧を屈て除(ハガ)れぬ命ハ延けんと追従しなへり亦大閤秀吉公後の奴隷より起て武功衛の備うとく高名賤(アサヒ)の暴るを等しく射国の天下ハ一統志なひ其威勢大明朝鮮に及へり拘きハ勇ハ素性に因へうに寔に猿楽を業とする者多し七十更か猿師に其多き家といへる者の分に六ヶ也と云し老御城内にて此能をし御将軍綱吉公の御目に止り御意に叶ひて出見小姓に召されて矢木主税信之とも号しける歴々の

徐ニ此ニ御所ニ今ヲ却テ不與ニ成家ヲ天皇例ニ今ヲ忠臣ヲ命ニ權現忠義
を感しかひて 綱吉公此一世の有徳成此所に志て忍を在しとの御に依て今
来迎ニ来進りと至祝ニ至ニ宮門の中に入かへハ忽社頭ハ江府の城と成て
綱吉公此一世の体を目前に見るの誠に奇異此有振なり

松平ニ天下第剣ニ之の

此の徳ニ有るの宮に成ニ(ミテ)されハ其流に行ハ君の徳ニ有るの功を成されハ其位に
居ハ故に夏后氏の政ハ已成罪志て民を寛にハ慶なるの悖業なりとハ今
此御代の時深風枝を明さぬ二葉の松文武の本葉末葉と栄へ昌ふる松平一天
相海に儀形せり柳此尚家第剣の第一世家康公ハ人皇五十六代清和天皇
の後胤八幡太郎義家の孫新田大頼助義重の四男徳川四郎義季より
十六代贈大納言廣忠公此長男童谷城竹千代君と号し三州岡崎の城
にて誕生ニ初年にて父君に離しかひ今川義元の養育に依て長と成かふ
義元討死の後頭に切腹志かひ人ニ出る紀城大樹寺(三州 [illegible])の尚住僧登誉
上人の助力に依て再び出身志かひ更に服ニ出立身をまして豊臣太閤秀吉
の籠本に属し関八州を領しかひてより其威を天下に震ひ秀吉公薨去

の後慶長五年実ニ東合戦に勝利を得かひ同八年従二位右大臣征夷大将軍
に昇進有足利将軍の例に任せて公方家の高徳に宣下有元和元年
乙卯大坂の城没落の以後天下を一統に治めかひ同二年丙辰此三月に従一
位大政大臣に任し同四月十七日此年七十五歳にて駿府の城に於て薨去
志かひ即日光山に葬りまりて東照大權現と謚しかふ第二代秀忠公(家康公三男)
慶長十年乙巳四月に従二位内大臣征夷大将軍に任し寛永九年正月廿
四日江府の城に於て薨去有増上寺に葬りまて台徳院殿と謚有第
三代家光公(秀忠公二男)元和九年癸亥七月に従二位内大臣征夷大将軍に任し
かひ慶安四年辛卯四月廿日に他界しかふ上地東叡山に葬りまて
大猷院殿と謚しかふ第四代家綱公(家光公長男)同年に従二位内大臣征夷大将
軍に任しかひ延宝八年庚申五月八日に他界ニ上地へ葬りまりて数有院
殿と謚有徳日に家綱公に此子一方も在ませ此弟君(家光公二男)無松君
とりハ第世志かひ三男綱重公ハ従三位宰相右馬頭に任し甲斐府中を
居城とし三十万石を領しかふ四男綱吉公ハ従三位宰相右馬頭に任し
上ニ在鎌林を居城と志かひ二十六万石を領して在ませしかふ 家綱公ニ此世

御に逆処なし猶更此一戦は嫡孫家康公の御利運に成て逆敵の大将石田
治部少輔三成を初め徒党の輩を残らず退治なし今の泰平の御勲功
数多有し中に先駆る井伊万千代が働を以危き御命を延させたまふ依て列石
田三成が居城江州佐和山城並其領の城を井伊直政父子に給はりて列万千代
元服して井伊掃部頭直孝と号し家一統と共に莫大の高名せし故に加増三十
五万石を領し今の世に至りても井伊家の一家は代々其[illegible]とて諸人
に尊る直孝の男掃部頭直澄其長男掃部頭直興之後ニ直該と改将軍家譜代の
長臣として代々大老の高職を務め政事を左右せし古武振き中古文武兼備
の英傑之時に直興思はれけるハ当将軍綱吉公より御世嗣の御男子なき
故解悉らるれハ兄弟絶列へ天下を御譲りと有ハ権現公の御遺言を守り尾州
公の思召の程も斗難しと差し天下の騒動出来の瑞も成やらん何とて苦労一方の
御生きまかりしと思ふなの殿にて名の為ニ吉と云合め家臣より更に自然に女を百花へ御
側にと仕込事と云へ丸綱吉公ハ館林御城の御かな絶花成を御持ちまして御座
所のなかにハ一切他の女を御寝所の侍へも入らせられ別る此の上斗ハ御危衛の御縁ある近
もへせかゝりハ唯御兇小姓の事とハ御寵愛ましまけるゆゑに御世嗣も御出生の

程に労使茂尼果し殺菌的出の例用人を求く所ち致し程に心ゆ
若し色らる政的を殺せしか京都か百里て御例に任へさせし女程七十
人よろしけよて江戸中御譜代の大小名又は旗本諸士或ハ有徳の町人等の備進
て其身弟娘先を上覧に入奉る扨多人数の中にそれも御宮に合ふ女の命き
すへはまし後は先何方へ成共御覧有之とめ奉り路に出まうに男女を飾り
て御しむ上覧に入奉る日後く御宮に合ふ女もなかりしか井伊直興に
此を殊られは掃部頭忠御為の御所々で尼なしか一段と純思案成へしと其ハ公合
よ然の苑を御上覧と参せて此後の例をなしめ奉りて扨るへしと口合せて
折を窺ひ此理を云上し奉られハ綱吉公此機嫌能花の宮御床かさんとや思ハ
定て御生中旬に女を有つらん其院ふ給て後生まさんとも定まるへき
とは此理を取り為て用人を志ありける

上総御光鶴と改め御姫君も本家御祝とうす

人君下々の遊楽ハ好む生し又に死に出へハ愛の所施万に心を移ん中より女
色のたぐひハ古今止すれしより夫末を観候へハ此世嗣の程を求ん
とにらまし心を尽しつて御上但へ此成をとゞめ奉り此機嫌能折を見て合

綱吉公へ申上ありは勢してを代公方家の御光駕ありは御通り筋の大名旗本
の屋敷は勿論町人等の居宅近門戸を閉し窓をメ辻ゝにて人止を仕りて
御行粧を御見仕候義は曾る今御座は御座は今度の御光駕は御遊山花見の御旅
まてなへは上野黒門前廣小路の数例に於て女中に御見仕せ候を御覧
成し下されなく彼ホ先め何をかり有徒を存なへし一ツまは御遊山の御逸興又
は御代恭年の御慶先成なるんやと窺ひ申れは綱吉公嘆ひ百を義はめ何御光
宣如か申へしと台命有れは御上意畢て夫木を統太し御を井伊直興へ
相志し世花中の面々分役々の組織へ内御を仕て觸ひるは来ん十二月公方様上
御へ花見の御光駕相さるゝ月年以十五六歳分御家中迄の名付ケの夫も
今ゝ娘等量備れし者先中衣類を誇り御を借ひ上野黒門前廣小路に
於て御行列を御見仕候をそ觸られなる此御觸を嘆るも江戸中の夫後誰か
夜沙汰をまるを頼く今度有司能娘中に御成の御見を御免有しは上様に
御世嗣の差異の在まさぬ故御子種をまくまへなかんを御家中を御
体有無行と御嘆に是に依て能本諸士の面々或は有徒の町人近有司能
娘を持し輩は我一と衣類を拵へ娘を仕立廣き云ふ上野黒門前の廣小路東西

南北の見世店を家入(ヤイレ)として借り更て宴を一世の大清と宿を日に続て用意
せり其以下儀の者の時しなるは誠やらん公方様の御母恵桂照院と申も元
来は京都西陣の織物やの娘なりしか棟裏様此御役人元小小路宮内大輔
家利と云御方を夜視に就ひ出ゝ此公方様大猷院殿家光公に宮仕致
なりされし上まて尚公方様を御誕生有ての御果敏女は氏なりして玉の輿今
は一位様ゝと天下の人か尊敬せる剰を夜親此御子兄様分の御方を百かさ
進て本庄宮内大輔居芳とて一万石此御大名又一位様の実の弟恵様は京都
の西南吉峰と云所に幽成芳をなされて御庭せしを御呼出しまして本
庄周幡守家資夜とて七万石の御大名に御成立有尚時は御三家に次ての御厳勢
一位様御建立の金枕箒や佛具様にも御家の御役九ツ目結を付く進て本庄
周幡守と申て有其御身分中の御果敏か一門一家茂皆深よりせかふなれは
此月ホか娘も御宗にさへ入たるは我ホも追付長短(大小のすり)をさしこるうせ跳(ジヤ)ゝ馬乗て
万石なの大名と成居しと御に祈る神馮(タヽキ)牝明灯し神酒も備へ天に茂上る心
地ありて悦ひ勇ミ夜を数へ其日を達しと待よなる

柳沢保忠父子白狐ミ神ヲ祈ル事

牛と書て牛と成佛と書て佛と成も皆是一心より出る故なりし實に新
羅源氏甲州武田家の庶流土屋惣兵衛家と云る者の代に至て本家武田
信玄九世嗣措杉ハ　家康公の為に滅亡し　惣兵衛長男土屋庄作家ハ故有
て内南部に召抱されし　家康公御知行二千石を被下作兵衛九長男ハ今の土屋
惣兵衛の家筋なり次男の柳沢安忠殿後ニハ家禄百五十俵を被下其子柳
沢刑部に保忠其子柳沢弥太郎保明（後出羽守保明と号す）と相続して或時刑部に保忠
守けるは依ハ先分の及さる事ハ佛神に祈て幸ひを得ると有難や稲荷大明神の
使者白狐九神を実を以て利測ハ現に奇特を得ると皆武州の二白狐と云る
浅草の誹なる狐藏の宗助狐ある所の叢祠へ毎月参詣し別して王子村の今
前狐の霊念ハ柳沢が住所小石川町の猿楽町より行程二里斗も有ぬなれと
千里も行も一寸なる成らんや毎日信心参りし日来志し祈りける依ハ我家因ハ清
和天皇の後流新羅三郎義光の末孫甲斐源氏武田の流家也終に武田大
膳大夫晴信入道信玄ハ甲斐信濃の両国より切て出て旗を挙九国に振ん
と欲し　甚越後謙信に震ひし程に不幸短命にて病死せり其男勝頼の代
にして甲信両国共に切取られ終に　家康公の為に武門の嫡流滅亡せり

庶流の土屋家ハ漸二千石取に至る家ハ終に百五十俵の小禄を致の才人あらバ絶
たる命を継家の再会しと云も余りあり拙者小節を親る者ハ業名を落す事なく
かさ御を恐む者ハ大切を立る事能ずとやされハ龍ハ泥水に蟄して一陽の至
るを待ッ武士ハ運の時を窺ひて暫しハ卑賤に居ながら天運の至来せざるにハ
是非なきことと只ひたすら運と昼夜に此存念止時なし何とぞ先祖の怨敵
なれハ板本の天下を亡し甲斐源氏の世となして積る恨ミを葉ら所に果敢
なくハ世に出保明が代に至りて本意を遂させてたべ成ったなし若又天下
此望叶ハ後先にて十万石以上九大名に成先立身させてたべけるへしと丹誠を凝
し肝胆を砕きてぞ祈りける世俗の保右衛門十五才に成て今ハ父子共進ての
日来信心なれ宮の神も納受の程ひ有らんと思ひけるそ我身なくも親孝
し或時白雨（ユウダチ）して難儀に及けるにより王子村の茶屋に休んと云へる者の
方へ立寄暫時雨を見合しに亭主能く饗応（ミミテナシ）しけるが茶を出して世話に成其
返礼の為にとて柳沢父子の人々云慰挟抜しきりしぬれハ夫より後も来て親
密に成毎日立寄て休息せりさ此亭主かおすへといへる娘の本人有りけるが山に咲
花ハ花として狭も恥ぬ色香なり其容ハ当田舎の女ニハ稀なる育ち器量能

山の端出る二人の月光り照りそふ稚ひい舟祝の唇を山の肩云ヤ句〻祝ん
世と又新ひ首〻くともお母ありて兎角形結やうして父ハ有徒の百姓牧世の遍
迫きつまを初〻ともに心を生ん通計ありてハ歴おろうとおハ
多分しうと舅姑の為ハとして琴和歌よんでなりて祝の喫雪の名月幻
薬よ舟を深め〻形を結ひ初い意美の程方卯いおし彼ハ古倉ハ義世よ備し
英男成しう毎日うるの休をおける用事昇映別保たのおし為者に人知をお施
書とれ智世り法〻ハ彼振も弥も商取方へ行てハおハ縁分ハせし初と張ろう
のうをい二人の親ハ笑しより合点つくうて結納し弥右衛ハ五一家お来ハ十
七家の初うに通ろて月初会婚礼をこそ右うろよ中義勝乃家法ハ
男女のうち義出来にり角て父の形ろ祝つハ机面家をも歴にして主の村
の稲荷の社へ日参悔おいろうりしうどし
ろそ祝彼初の机のふに松しう給よ空参成ろ月ハ本定ろうろ法〻
柳沢保明切奏任官射候
峨江の以上ハ鶴沢深もるも捷よ入くハく
弥右衛保昭ハ史掛お参初名ハ今度上極にハよろ御成在ハ法〻

答量揚し振を打うる而ろハ仰まも梅用ふをて共日をふしくと待ろ記号の
振ろ祝〻す親のひが角云いう成先花の初ハ最初ハ成ふ法〻ハ体の大ハ
谷旅年話主の用そも面振よ揚ろ者ハよろしく自振四主ふ家
参委面ハ先郎ちうそ日の長乳梅へ義香〻き方使の有されハ家の山よ入
らんまもおひ給うる沢参なうろおまなうろよ有用勲揚れをハ到る当ひ有〻し
物を実や富多ふれハ差を張しふ負ろをふ身ハ私を義ハうとふれ上にふれ
たうう血を振ふ世祝うこち階新〻ふ指ろ
ませぬうふ信れハいろ指る用ろハかろ
第一四ヶ結ませんと用よ入先ハく四二面花ろうう話をき面へ出ふかされての内
歴ふまの例ふそ日ハ形〻ハ先ハ稼振ハ張ハ入花ハ〻して四用おさいや四用ふ者
席よ此四番ろも四差九触四振ろ梅ろ指ろもろも面ふて四ろ指ドて指主
をふる今度の四成を四洋九四紙均そ
ましうるやと尋きハ妻の如森ハ先をふ
うう親のひろいひにく計まとハ九やる通り十人並〻揚きハされと労ら奴差量
の振を一人指されと伝をいかんろも此方ハ小身物仕指ろ出来奴奴をろと今と今

合せしに滅尽二人勇むまして御当所まで嫁く人くハ婚礼を致く世話し申か
ら今占の世話て娘え人の家親ハ加様来らせようし白ち甚の侭そハ其ても
引き遣まし了女ち二人連まつ一日ハ成まへし余力ハ有らもふ了て見か若し極
銘ハ香て有いやらふようしまそ了をされと云ハア、扨く其年の弱ひ仏心庵の二
不依へ此家業ハ向備此様ゐ丸二人ハお慈の若勿此ゐ勿二丁極召極度落の
情り座方限毛鍾何ら一りゐを私ら呑込まして中積ま波しまう金子百七拾
両ら動百両返の了于仕須せまし了ら其形依ハ此大谷私ハ此用立し是拔不
并ら上様々比月ニも些了氏て衣縁なる八呂拔代や雜用金き両ち九ハ波まセ
ぬる々私江戸へと見在さへまつ遣ハ襲りとする了ハ海まして此処度気へ加ち此纏
我ハらけまセね者様ハ此嶽和此衣りまてきまいら古杯のまし勢りまして
百両や動百両ハ仕出ふとのハ江戸中ま深山に此さりまれ遣ハかち此心よらけ
ら遣まぼか此日渕猪の判形右ひよ私ら卦諦でめて蒙ひましてれハ当其
よりハ大き成仕合ら呪付る様よお来て來て一生の運ら開かるとやまし出若ハ氣
けど先私ハ石汲太々用意を波しません々息も絶えるよ嘆りつ寂々極ま一
人根ひて飛らでく々泣り～しハ勇ましからる有様なり

右師雲洞御仮保的ッ相スルコト

訪蘇と派徠まるす万不以在よ入て鄰有例し有唐の玄宗皇帝ハ吾律
の名人よそ二月初よ苑の嘆ぬすを牽しと楼臺よ上て羯鼓を打るへハ余
ぬ去く楷の苑開さらぬを開かせしとや亦鄒衍と云人ハ筆に五十年来
心を尽して七十余の歳まそ妙をねらり六月よ冬の洞子を吹て庭前に雪を
降し万人此音律よ目を驚しらる此外尼慈道人我朝の果心居士是から
気術の法ハ人のんを逆ハしめて世の高人の耻とも成さを何の益ら有らんや
爰よ当地山の行人流よ雲洞と云る沙門の有しに学流の僧侶と編まそ争
論し生ゐ一山々中能からえ去て山を退蔵しそ江戸へと誠不縁を求めて
湯縁の天神前よ旅宿を構へ氣人の書判の善悪を考て吉凶を占しに掌
を指らごとくよ的中せしらハ江戸中の町人ハ向備雜ゐ丸大谷方まそも神変
奇妙の験者成と流布し今時此の凡庸しそ観云化仮ハ手足の叶ハさる
年来の病人を一引まそ自他よ御ら在者人まハ死よ眼を寄る仕様まる奇
異の行をまうひ云鍋まれハ物見高け化鬼気男女度病平念公す術治
療すの形勝を敬来りし敬術永礼残ハ山のごとくに集り日後追て無呂膳

發拳て諸人雜集せり柳沢源右衛門義氏猴志を吹及ひぬるをよしに切賣仲裔
り將せしを吹て五子の稱爲へ日來せし下向尾湯浴に立寄雲洞に對談し
今度歌ゟ有くこ付吉凶を此考物入申して書判を出しけれハ雲洞ハ只一月見
るより横手をすゝ反打く掛く奇異の墨迹うれとこ度追拝戴て云けるれハ先
こハ先祖正發筋目なれ共此二三代ハ沈淪して埋て居なへ共已成りな時成ハ貧福
榮枯ハ斗難しとハ云へ共今此判形の墨迹ハ蟻語の事を得て天に登れる
めきの勢ひ有尚喜愛の事に至るハ日城追て此か世なるへ果其兆しの脹
中に能ハれたり物毋發心苦せとそ占ひかる不忘義なるゝ義源右衛門ハ家にて
る尾竟ゝ若くこ心ひ去ても占の表見通しゝ云ゝるに相違なるゝ義なし其
上果ても兆しの能ハれしとハ彼切賣かすなるへと心の内に笑を含こ勇て我家に歸りる

綱吉公上地ニ花見に此光なるゝ

武州江戸上地東叡山圓頓院寛永寺ハ人皇百九十代の帝後陽成院の此宮
寛永年中に南光坊僧正慈眼大師の此草創まて大樞相ハ東照大神君
家康公の此建立之寛永最上の惡場に立て諸人の渇仰他に異之江城分良に
尚れるにより帝朝の法敵に准らへ東叡山と号し寺義延暦の例に習ひ寛

永年中の草創なれハ寛永なるゝ呼せられ江城の鬼門を守護し惡魔を退け
西家安全武運長久の祈念不怠鎮常に天台四明の法燈を挑け佛祭之觀
の覺月を仰く名山なれハ方々此神社佛閣年を追て光りを増し五重の塔ハ
露壁硯に雲花鶯宝澤水に動て奇く物の内東照宮を始さか代々の此魂全
水晶珊瑚の柱を並へ琥珀瑯玕梁を搆ふ五色の扉ハ朝日にうゝ風く數重の
軒ハ菅屋に忍ひて結構奥麗云斗今有ハ七宝莊嚴の喜見城も金沼なる
を孫文書ハ英木の樓花皆白妙に咲き續き吉地初流の名所も殘へたり山上
より見下ろせハ不忍の池月の前にて有なるゝ志賀の湖れを殺し中海の兵船
ハ行生鴻此心ひをなせりいで其沈元祿七年二月十百上地の樓今を盛りに咲
出しうり名遠ハ是を中立ニ志て花の色能咲祇きうるを此境せられさんにハ
花の高いと口惜うるへしとゝ中上なれハ綱吉公の百花ハ此一境をへしとて昵
近諸代の諸侯旅本木を百具せられて此光駕を上地黒門前の廣小路ハ町幅の
廣さ此月余も有不なれハ此前無ニハ西例を通し有り遊御にハ東例を通し
なり後に矢木之祝う若屬せり故東西夏例の見無居にハどんも繻珍の幕
を張り紅の毛氈全屏風を鋪り立有目能娘の色競へ衣裳競へ更を尽し

うち共此時孟嘗君も面を赤め首を垂て将軍
将軍偖吾公ハ己の刻半より此かた樂有事
ありてかし一盃をもすゝめ方の家を
の係め花の枝折く去此の秀や実よの今の
しくゝと俯しうち人の口実ゝ
惜んでいまゝ心を残し時を感してハ
ゝそうて面白しゝ共感悦をまして去
配(タツ)ゑ折ゝよ結探とて
ゐ此係成ゐをみて人の係よ花見をは
に出く釈給ふゝく此家をも帰らん
成ゐ進申の刻半まて此処に有ゐく澤
ハ廣小路の東側の月一両うりうる私よ此
又今日も西側といふ静よ列ちる私よ此
の前通ゐハ本町係此所を御ら吾宅之
をゐ吾ゐうて此ゐよ此処に
けうてそ帰りうる

御沢山参詣之処ゝ

深き場所ハ拾所の口係ち私をハ第宅
の私と先ゝよをしこれハ拾を納もる者ハ
ゝやねゝ将軍偖吾公よ此の花見ゝ
夫来ゝ祝御ゝ合ひ一女房ゝひしや
咲く海ゝせゝへ何の此吾ゝをもゝ係
ゝせゝへ此ゝ事此体是ゝをゝうる門の
此所民のゝ祝るれいゝそ係(サヌ)ゝ此(コヽ)
ゝおしゝ吾ゝ此ゝ日数三十り外もゝ
ゝ此ゝ花見の係ゝ此ゝ吾ゝ係ゝ
小ゝ吾ゝ此ゝ花ゝ此ゝ吾ゝ係ゝ

しうる此無を立ゝせられうる事ハ別御沢山参詣の
事成けをハ梅ハ此御沢ゝ拾ゝそ上係の
芦ゝうる事例ゝそ事見ゝせ一栗ハ上係の此無ゝ
けゝそゝそ帰りうる

御沢山参詣之処ゝ

深き場所ハ拾所の口係ち私をハ第宅之
の私と先ゝよをしこれハ拾を納もる者ハ
ゝやねゝ将軍偖吾公よ此の花見ゝ
夫来ゝ祝御ゝ合ひ一女房ゝひしや
咲く海ゝせゝへ何の此吾ゝをもゝ係
ゝせゝへ此ゝ事此体是ゝをゝうる門の
此所民のゝ祝るれいゝそ係(サヌ)ゝ此(コヽ)
ゝおしゝ吾ゝ此ゝ日数三十り外もゝ
ゝ此ゝ花見の係ゝ此ゝ吾ゝ係ゝ
小ゝ吾ゝ此ゝ花ゝ此ゝ吾ゝ係ゝ

しかし仰を主従畏て薬て御供をさせ全くなりなれハ懐中より虎の御図
を取出し西側の方御覧なされ二軒目ハ柳沢保右衛門か妻や娘まて御座候なと申上
是ハ何の百姓柳沢といへる成者そとの御尋ありけれハ御餞を下され御会釈上奉る經
下柳沢保右衛門と申て百石千俵を頂戴仕御旗指の役人にて御座候と言上す　綱吉公
此の百姓手細の其方迄当家に召仕へん事御年寄共に申付て其通り致仕候事を仰出さる
御供の者に召り主従ハ心の内に悦ひて井伊掃部頭へ此由を仰られハ早速御年寄衆
へ触候而て小身の小役人柳沢保右衛門を当家に御召抱百姓に召さるゝ旨仰候事
是ハ甲州源氏の末流柳沢の本家なれとも故ありて浪人となり御旗本の列に加へ可申なと
成して利知をあたへんとありけり旗本の列に加へ是有て既に近くとて御取立ありしとし
に其祠有り古ハニ云しゝと其ハ末たも立所せしハ父形部か保忠か王子村の白
旗の神へ祈念り旦暮せし利生なりと既に斜ならす今も御勤之所稲荷
是ハ日来これ有る故の方に居宅の内に小社を建稲荷大明神を勧請し
日頃祠を祈念せて宜しく武運長久立身出世の祈願をそ致しける故に
此社ともに御出世せんと励むの處寝食を忘れて祖に勧めける故
綱吉公の御機嫌に合ひ果て終に出頭せしにて御側衆になされけり

御二ヶ月斗も勤しに又御加増之御加増を頂戴合わせて何千石とぞ下されける

綱吉公戸田川に御鷹狩之事

或時の事なりし御成之其の花の楯遥に遊ばされて霧を払ひて飛騨高木飛村御前酒
召されまし空あなたさ小き雲の月の出たるを見て將軍ハ御鷹の遊びに戸田川へ出されける
有御拳にて鷹を放しけるに其時御鷹鴇房を一蹴に摑みける雁のうちの一羽ハ
成鷹揚の鶏ひ別段成ことハ云へたる鳥形の大きにわして終て空中にて摑し擲て殺
しける所に御鷹ハ下手に成て其の方か出たる斗よりも向の沢の中へ落て其ゝよりも是
御の眼近かハ向歩葦繁に引よする御鷹匠人皆を知らず泥なれハ従者も人足と
捕んと走る者もなくて危やしと引て遠の處の雁り居る柳沢保右衛門其近くを見
るより旋速に云ひし小萩の竹を切りて枝を突出の池に飛入ハ思ひし分ハ浅
くして飛込ハ彼所に居る鴇房を捕へて上帯に挟み御鷹ハ手に居て元の
處に泳上りしハ帰らしかりける御機嫌も斜ならす彼鴇房を御前へ差上ければ將軍
斜ならす御感浅からす甲斐く保右衛門か御天晴出来さりしとて御賞ありて有目
頻く御近の道遥在まして日暮に近所在まして此御鷹の後月の御座
を出る百石にて仰ける今日御鷹狩の場所にて柳沢保右衛門か成人に致し御

のち戦場の勇戦も忘られて神妙の至と賞られて褒美を
あるごとに加恩を被合一万石の領を下し重れ有事に更代仰付られ候
の列に座下さるべき条申渡さるべく候其外共仕へきるを仰出され
ず候へ小野北條七々出勤し次第よりは三叶ひつゝ年限候へとも候
の数に入らず候ハ、陪臣より郎従に至る程に等しく浦山さるべく候

御綱領條矢木を祝奉り退出をなす

一娯則ハ頓て心驕利ハ欲より為へうらみ古の屋敷の城也共ハ私に
其儘深く保をし六埜の楽歌ハ管一厥離をへられ候へ共絶のごとく止絶し
将軍 綸言ハ汗の如しと云ハるゝ如く初めて仰渡され候へ
ハ速石高ハ減ぜられ領地ハ没収せらるゝ事ハ勿論世禄を削られ
世継を儲ざる内ハ為に用捨なく出来次第に没収せらるべく候
ぬまでも深く忠節に勤仕せるべく候ハ、蔵前の豪富の徒家ハ世の人口にも膾
炙せるごとく一日として富貴ならざるハなく候へ共其家ハ初より
系図ハ勿論古歌の心を一人も知らざるハなく候へ共其家ハ
皆文禄を祝ハざるハなく候へ彼是ハ共

人を非ずして天下の政務を主とるゝ事ハ日本の神代より
八氏神武八幡宮東照大権現へ捧げ祈をこと万民を撫育し安泰ならん
欲をる志ハ我心を凝し絶祀戒を持んと心掛をて第一御慶新へ後
中没せんとハ大丈夫の一言違ハんするに等しく違ハざらんとて
ぬれど我心牢固にして動ざるハ彼元服の日の神く別をと
彼女ら姿を案じるごとくして心を慰へし此古心ハ絶よ半ば世を発
方れハ祝器を取り酒を瑠璃盃に注ぎ天下を祝ふやうさん
悉をはす之古ならん鎮座の物実風の物絶生ます事ハ云ふ迄
報てさるべく候也ひとり天和三年に当
せる人丸ハ世継の為実を生まさるれも天下万民の歌を以すべく候て先井伊
直興を招宿の為実を生まさるれも天下万民の歌を以すべく候て先井伊
ありますハ此月此の出仕楽ハ祝ふて当るあり
ます彼女祝を祀ハ祝宅へ百万人一統の悦ハ
ずら先ハ此祝ハ天下一統の悦ハ
急ぐも候ハ、皆々よろん万一神意の

出し海山の大荒と中絶うしに是に依て心面白かるぬ中に交ひけんかいと毎月の不
縁なる事江戸へ下りて神田の近に住居して居りけるに元来世に秀し活僧成故茶枳
尼天の法を（仮僧の法なり）成就し白狐を傍表として仕ひ諸事の吉凶を占し故江戸中の
貴賤婦僧の雲洞か神田北魯海かと車の車輪のようにしてひ持覚し皈依仰
尊之諸大名籠臣の祈願祈禱に晴なく門前に家馬の絶る間もなし徒るに海僧
の雲洞かの若輩として当時日の出の勢に御使出来る所か急に此頃有度也の使
志来し故其物も其敬を使者と打連行かれは出来る御迎来連なりて申請とへ
し昨日祈竜へ将軍家此光寺当へき筈成に夜前か車輪の大数降なれは定て
此光寺お止へしと推量されと若当て為べき方便もなけれは徒日不二雲洞の僧
まて取る外に其僧す神変奇妙の験者成也取知せり何卒止雨晴天の祈禱を
頼まる之祈願成就後し昨日御成なくに依ては其御礼は其僧の望に任せ申へし
亦祈禱の入用金は用人共より渡し並ひ月に徒日も早く頼入の地まさるれは常海
委細の西陣等て寄印を結ひ贈し観念を凝し占ひけるは当月は癸の丑の月
昨十六日も又癸の丑に当て月日の干支相陰に当れ是徒も雨の晴ならす有へからも
候恩僧か秘密深意北法を以て祈る物なりは変定志て晴天に為んす業を持

ちとく成へしちつ先此氣色有へからは将又大切成御法にて此へは験者を数多集
ひ此へは礼金雑用ホ之人分に入申度く此へ先今度の入用金は此僧か補にて渡す申の日
す成就仕の上に於ては其云の此極持を以其を将軍家の護持僧と成れ其上天
下の祈願所に お成り候に此日入下さるへしと有りけれは出来ぬ事なりて何か扨く昨日の
此光寺等尾張お御ふに於ては其か身上に留へても此極持を仕らん事急成義に有
らは所時も早く祈念之義を頼まるの地を望み給ふは早速其意を渡さんと陳ひ
志て立帰り早速浅草川に於て止雨晴天の祈をそ始めける先友玉橋か川上へ西
例の川端か川中へ五月斗押出して方一丈の機器を間々十月宛無く十ヶ所を拵
させける大名方に石時の要用の御当く御家を仕別する立僧と云る者を百家金
子の入用に抱けるに云付けるに依て縄かうしに笞やとは云なりし多人数集て皆時か
祈に仕立なり扨標毎に淫逸を張市之の幣紙三本宛門隅に建洗米外酒木の
供物を拵け一ヶ所に十人宛の者云僧を頼合百人集め金光明最上王経を高声
に読誦せ和足院魯海は別に方八尺の床の上にて護摩をなりし獨括を以頂
を突破り血を絞りて乳木に洒き丹誠を凝し肝膽を砕き祈られは不思議や頻
て降る雨の手の下刻か祈しに申の上刻に至て西北の雲晴て東西に行雨の脚

篠を衝こゝろに吹晴て忽晴天白日と成ツ雅も旨西天に輝き見へ行るハ奇妙成ける初か

偽合公始テ柳沢ヶ亭へ出光御ことす

万里の高山に雲忽に起りしかと一樓の明月に雨始て晴渡り叢雲の折柄と云へ
共相傾ルも去来にて枝を明きぬ時とかや枝も将軍偽合公を柳沢ヶ亭へ始く
招請しまり山海の佳さうか名物珍饌を取調へ色黒を賞へと程々に餐宴成し
まりけれハ此君体の面々と楽に及ひ打良の程日足月弓の射ものとくに傾き
てさや夕鶯に成まりけれハ御寄保明ハ此前に長寿夫木を親を以て云上しけるハ
小身の私義御ゝ此君之を以て人分の乗地を有給仕時更出ぬ事に任せられ諸侯の
並に成下されハ御有給仕合なまり責てハ此君の高恩を謝しまり家を為に此光
駕を祈上まるなれ是又此の百石を出せられ此機嫌能此程を成し下さる御中上へき
根もなく実加知恩の程恩なかゝる大悦是にまるに存まりけれ此上に此所の此君は
迚とのあるゝ此へハ恩妻并娘先に此月見へ御付られ下さるゝに於てハ重々の大慶何
事か是にまるゝ事のはへきと窺まれハ偽合公此百今日の餐宴御是之輪中妻
子か所に御せ目通りへおもへしと御有けれハ出ぬ事畏て此座を立業や娘を言
連てこそおよける保明か妻の所ハ今年二十四年にて盛ハおしまぬれと言葉

ましまの連接容色嬋娟の世に稀なるのゝに非ず琴ハ名を得し上手にて顔
の色ハ小野小町を欺き花の下に家戦縁し映ふ色を悲しめり去ハ其情を
笑其鶏戦乃る人毎に心を悩まされといふ人有し娘の手代ハ今年十六年蒼
笑顔ハ陽春の徳戦迎て事枝花始とし異く雪の中の梅白く志て芳やう
成に笑からを偽合公現心に成らせ此ひ母や娘の顔を見ると此絶有り此月
此日此意募し義無理なるを世にハ新る艶麗か成女も有ける物をと不覚深
立此意を揮志つめかひて此意戦母の所に下しかひつゝその宣気とと御けれハ
これハ勿体今き仕合と再三辞退しまれハ新る拝宴の席にて何うを急有
へきそ是非に是へと宣ひて此機嫌能百上ら色は上琴の一曲を此所望なませハ
畏てそ弾へける△笑を黄木の下花脱に充らり肩を畫く窓の前月横し
殘れり優艶閑雅の楽に英穏に民安く国偽まれ秋深風と揮起してそ奏し
ける将軍此感斜なるを此様を娘の手代に下さるれハ云葉ハ有りて揮裁きし
を是へと上意有けるにて恩なるゝも是にて同義琴を弾しける△万代の例
にて鸞梓弓八幡の外義活りて民豊成此代とうやらそ視しける親子か弾
まる琴の家声も頻伽の高の急戦天楽の調へハ琴柱に落る一人全抜事の梅

か秀に柳花苑も分かりしく秘曲を尽して弾鳴せハ保昌公ハ夜雨のごとくに成
せ給ひ此奏曲の余りにめでたく此座の輩ハ皇かれハ今ハ正御もまさに心御よ
碎せ給ふ主殺ハ此を見てまりけ此拵まてハ還御も成りまり給けれハ程なく此屋形に
入まりて後日へかんと宥寄まれハ娘の手代ハ保昌公の御手を引まれハ母の為ハ
宵よりけまりて此屋形に入まりける主殺ハ宥重ねて立まうとしと思ふ人極
まハ此月次の御恋暮る今宵逢瀬の御本意をとまハ法貞せでや仰とそ此よしよ此
扇其の御風と宥まさせ給へかし飯命頂礼ハ臨大神宮四之飛来照大権現冥加有
ちて語なへと一心不乱に祈誓まる忠義の心そ殊勝なりぬる此夜の為まも時刻
移りて不九つの時計を宥援斗よひくにて見ハ女房よ何すん此光啓まますまき
還御ハ扇も神夜限り刹限太子延引せしかハ供まの衆も待ちてつんと静に
たて此屋形の入口にて謦咳して窺ひ歌けハ娘の手代ハ蔑風の此方に掻潜て居さ
りける主殺ハ不審晴やしまで此床の間ハ御前の此簾らまますかと尋ぬれハ母様ハ
よ扇の此御倒まで宥重ねてまますれと云をさめと申騒き此隔れの主とハ云かっか
是に己ひまれの有なかくとめまりしかと是やうと御傍うし祈風へ此言かっ
りしハ扨ハ推量の的の違しと当方に言く居られしか扨ねまる若見付かハ

何のかの一言のもと此屋形の為に恋深く大音桐と嘆ありかハ夜も深更に恋楽
君ハ還御なりまして後日へかんとや上まれハ保昌公此声に驚きせ給ひ局殿ハ見
ぬ傍しの方の逢瀬を待ちまとて此心ハ殊に涕させ給へ先人目の関に隔られ是非
なく此御機嫌なりける

日光邯鄲枕上巻終

日光邯鄲枕巻中

柳沢に随従せし葉之助英護持院僧正の事

抑も夫世に出る者ハ謙遜して国を偸む者ハ侫を成して実成不古人の御格柳沢
出羽守保明ハ小身より出て大名と成り倒へ保昌公の寵を得光啓まで深更にまで
此機嫌能く此者を成継有仕合と程よく殺すに此れまして大城せしかハ扨翠出羽守を流
し来り所々の答申の此恋に叶ひし其身としてに召まる万石の加増を受る二万石
を給りまれハ扨翠ハ深月まて絶しまる是より扨翠ハ柳沢か事に驚くに此成
立まりて後にも娘の手代も先しかひハ随従ハ一家も滅亡せまでぬ従ひ出羽
守殿ハ立身して元禄十二年に迄よる七万石を下しなりぬ破格の驚女に儀也

云明の眠の中に玉家の祝ひ事を無へかりしと云かふかも有ふ居かふかも
保明と上げ用ひさせかふ故天下の諸侯へ能本等柳沢か下に云んすを
見たる祝ひ先年后をし柳沢家の祝ひ諸老と定置し雪洞といへる法
師ハ不幸短命にして病死せり又柳沢の卒へ将軍始て此光駕の長時天
の祝をせし知足院曾海ハ出ぬ事か桃持をれ綱吉公へ此月見をさせ其上
将軍家の護持僧と成かふ神田橋の御に方二丁余の寺地をかりち御三恵
をあらせ常陸玉籠波山の別当職に補せらせ院号を護持院と改め氏
而ふして大僧正北宮に昇進し日輪院月輪院と云ふ両院家を随従し天
下の祝祭ホとて成よりる柳大僧正の位と云ハ正三位の大納言に右当せる事
にして当宮の僧綱ハ一天下に唯七人に限りたる事宮にして凡人の此宮に住せ
るハ過去家の恵本寺増上寺知恩院の二ヶ寺ハ玉帰に准せらるゝに依て又其外
の家名ハ拵家清花市の夫息此祝子なりしてハ此宮に昇るす成りたし是に依て
常別籠波山の別当職ハ大僧正拵武の寺右寺に依て護持院兼帯を御付ふ
なる毎日光城を志て将軍綱吉公の此事神を加持し折に解てハ飯綱の法力を
以不思議を祈して将軍の此心を案ひ或ハ阿諭ひて此意に入ぬ事ハ日光此事の

此威光にも昔し当時ハ天下第一の大僧此前よりしとて数ひける是に依て諸大名
籠本の面々追従諭ひの為に武運長久之所出世の祝祭にす家也是ハ御礼
金を持運ける故江戸中第一の繁栄の寺院とて成ける次に柳沢か小所の長
より紹沢茶食ニ斗といへる籠本も保明も桃成をれ三千石の知行を一万石に此
元立有て毋後事に任せらせ大名の格に成しかふ又先年上使へ此成に長柳沢
か妻や娘の衣類を請負し切賣の御前と云し志も出ぬ事か立所出世に連て
元立らせ柳沢家の定紋花菱を象りて今ハ菱屋底紅の名を改江戸ハ
本石町二町目の小例に居宅を構へ京都ハ室町通下立賣下ん町の東側に屋
敷を求め柳沢家の呉服所用達しとて成よりる諸大名諸籠本ハ勿論ち
社の経職此職内用達しの町人ハ是柳沢家へ銷絡れ青物時服巻物綿端物
ハ云に及ハ菓子乾肴名酒の事に至る迄菱屋底紅の方にて調ける物に首さ
れハ一切更用せさる様に元氏の役人ハ云付重ぬれハ長帰を請て菱屋を取調
へし故に底紅の御に徳付年を経て志て江戸中寺院の大分限者とて
成よりるさか不縁の大名籠本達保明へ銷絡追従せし筆ハ綱吉公の此前
桃成能志ける故立所出世を志ける者数を知る此目覚しかりける有様也

柳沢娘手代姫死去之事

待宵の月ハ視覚せを既望の月ハおかしからすと物くるやさしれハ清少納
言の詞よも凄まじき物師走の月老女の化粧新しく喪拝たり左様将軍
綱吉公ハ此度柳沢か亭へ御入之初の月老女の様ハ妻の様よ御心をかけらせしら
れ流石ハおねおもふ私もかやとや心得給ひぬらん又次男に老行る新ある道ハ今
ハ御心に秋風立て絶しからを娘の手代姫を並び寵愛まし々つ娘の恨をお忘
させ給ひけれ並へ遊び入らんと宣へ大保殿が心の底に巧む子細のある故よるて
と存近しまりやよるハ我身の私を此れ立下さらりハ姫を手代が此窓にけひし
放成と世上の人口に語りまさんも口惜しく事なきと此御家登桂昌院殿へ無此議
所の第の怪我を何ん罰為て将軍の御威令ハ天子の論言同前にて出て再ひ
為らさる汗のこと君にハ他把戒を御持在して此霊廟の御前勤任女中一切停止
て仕る御近の軍ハ御倫大元老中の為に返答致仰渡されし上の義に御座へハ
此段在男人衆に御忘ハ仕ましやうり此儀に若垂れ打に頼て御光考在まさは一円ハ
御聴こもお成有一御寄術の御保存御寄令長久の基ひまて後よへしと兵右に任せ
て云ともれハ綱吉公ハ泥よ砕たる銀のように何すも桂昌院と共方とる迄而

此身誠よ私からこそ仰たる拙る私よ手代姫ハ哀傷柳の風の心地そて悩しら熱
気もかならく々発しお見えるるよお見えへしら其所江戸中一般に此病を一痳
疹を病けるよ依て医療の術を尽さんよも験者の祈祷を経をるるも甲斐
日数ふるのみ次第よ得よ衰ぬれどおゆるも史ぬの人々ハ力を落とし彼是のくら
此上ハ果る様勢も遠近と嘆悲まるてある程なり将軍綱吉公も深しく御憂
大方ならもを寝食たに換らせ給ひけるうそてゆくる有様なりを祈祷
正柳沢か風姿へ来りて頻りしる様ハ息女の死去に依て甚歎の様ハおのせずして
世の中の親たる者の身よして子をおもふハ人倫に限りまて権花の蟋蟀の露
梁の燕なんと成る迄も我子を思ひ侍らん保成か今の世の習ひ早死
なきさすと思ひ悟りぬるへし云ならりて此儀に安閑として居なりて将軍の御歎き
云すなりうまる度の御身の上の威勢も薄りきたとハ地獄にとても死に至ならき仕合
れハ更月貌媚妾女を喪ひ手代姫の妹成と侍り申し綱吉公に親みせ忠を尽め
まうりて物なりハ身一と痛へ射して八忠依と云次よ其ぶのさんの事
の物不なれハ左様ものおく喪ひ姫の侍合せ給へるへしと近もまへ保成を
よ心付先ハ永なかき御教訓流石ハ将軍家の御分別ならハ此沙汰をなさんとて

家老柳沢将監并ニ藪田五郎右衛門を呼出し件の密事を相談し危キ事に所領を
追へしと云渡せハ件の藪田五郎右衛門ハ柳沢が少々の仕分外を恐ひし願りよりし者の
すかれハ下々の諸役を能知り振し為成役目を勤め納物の年貢をも取立る者ニ而
須田川ニ住居する所せ屋五郎左衛門といへる者ハ藪田か弟にて家の者役役を寄りよ百姓
の弥文ニ血判させし其上ニ而柳沢家の家老の娘のすを貰ひ望し其尾能ニ御
し手よ八藤兵衛ハ家ニ仕せんと云けるハ五郎右衛門思て所々仕の家ハ抽者あらぬ家業の
すて財を家の為申れハ能ハ早く呼出し御用を達しまさんと談合にてこそ立帰る

柳沢万代姫を養女にまゐらす

額并ね八百カ日の演の細くか代万代の際ニ其ね松蔭寺記此恵ニ家繁栄の
江戸の地実ニ活計ハ第の程よ其年貢の仔静屋五郎右衛門十七間の借店へ人を
出して云せけるハ此者を怠まそ此家の此名ハ際ニそれと西国方の生ん実名此
由ニ而百連らり此家主女中よ此用之笑覚に存てる分の合子をもって一生
不通に為至ス十七八才の娘をハ三百の内ニ尋らんよく猶られハ史よ訓る年
貢九ニ而弥貧ニき浪人町人の更月能娘を持し方ハ兼てよ依ニ仕けかけハ読
々能々人数も内許定をせし内よ其神保前の日乳町ニ住ひける浪人今よ

荒川平蔵といへる者の娘こそ器量よく心操と云ふ手方人よりも勝れたる者元
初の様内年ハ今年十七歳琴三味線の上手ぞ又前ハ大谷人十種香第の下
家の之後書物ハ京及ハよ何よ不足く八分られ九振なんと細義成る人とし七ツ入
仲ケ月の許義一段ありてりせやる為清彼日新町の浪人方へ立派云つる彼ハ今度
去ん西国方の此大谷此家を百挽させらりて私尚前の更方様の御ニ嫌悪深く
論せらハ役尚分其此大谷の此名ハ脱しかさるを大事ニおりて天元振る至他
の便りより成中さん尚分様令とならて今子五百両相談り為に此更れ立
たし梅なら付添て此家中の諸士方をニ親ニ後ねれハ一生不通の沈定を此
元有らんとの此事之此事ハ尚実成されかハ状文の便りハ我相方が無法逆沢
まへしと何角のすを相討し今子ハ一札只を川留ニ違の無物を用念し
て娘を連て参り川ニ仔貢仲ケ月の者左へも極めの口銭十分一今子か為後世
を報尚至れハ治ニ使付さ候らり相を夜丈人稀て後日娘を寄よ柳沢ら
府番へ送り行れハ今度其寸の御至分之隔けよありて窮く他に渡ぬ
きにを云合め龍頭とりして金子弐百両をやれハ翁首仕合く悦ひ家内
畑りより出る史娘の人くハ悲しる娘の前程生する心地為て親ニをふして悦

ひつて窮地斜なるを賞て別際を重しとして云ひるは去る頃某吏姦の若秘
蕊の娘よおくれしうとめ仍成此世の宿縁にやはり此方なりよ来らしは佛祖の
此門合こそ有やらんとは上は蕊の親と思しけれ理分に孝行なれるし娘の千代姫す
は石恩海の幸にて上様の御意に叶ひしうち不幸にして先を逝たり悲しきを
深く歎かせなふなれは其方を死したる娘の妹なりとゆゑて此宮仕へに出だへし
利名をは万代姫と名付我ゝ吏姦の実子の娘成とゆゑなれは理分御意にはさ
さるへし上様の御意さへ入られなは其方の実の親達をも来る方分心を付けて
安乗に当さるへしさまれは親と共の悦と云其方は氏なふして玉の輿若又此上に
若若様なと誕生あるらは相ん月別度からんと今迄に月別ぬ衣類手長具の中に
雑ふれ高倭元付くの女房達此娘様と当敬されは此娘の身の上は宝の山と云同へし

万代姫揚貴妃に拝とす

衰楽の乗に変す紅葉黄落の樹に似たり唯世の中のなれは夢とやらん現も
偈へき虚しとする月日と散花と紀競べて行此の流て速き源川月日の立は
夏そうし扨も将軍綱吉公千代姫に別達なひし此歎き今は浮世をはらき
なし此し当させなふ打物護持院僧正に長なて云上せられるは千代姫を行

の後形此熱歎に此入直ましては此失切の此身も頽随させなへ若此遠例にも成せな
り才一此母嘗桂昌院夜への此不幸次に天下万民の歎き何すか是に志なんや今
者定離の世の習ひ愛別離苦此理を無へさせなはぬは庶人下愚の身の上なり
亦も若は一天下の大樹と志て千代姫に並りたる女を此仍係付られなは此御御も
思へし能中千代姫の妹に万代姫と申女の此者は英目貌婦には甚に増り神
史に翁の上にて取り給ひて近日柳沢の亭へ此光寄直まし妹の翁の一曲を此
上覧有て称るへからんと申上げ是は綱吉公望し百称は熱時しの為に一覧せん
とおは此機嫌の色形はれなる千代姫死去せし後は柳沢の屋敷へ此成も中絶せ
し私に今度僧正の進めをしまに依て来七月七日に此光寄直をさるの台命故
御成の日の庭前に彩に翁蕊を建させ乗屋の入口には今禰の腹帯此川幕には
繾纈を張り翁蕊の上には紅緑の毬を処布とり其莊厳の体羅くとしてさなる
七宝を瓊たり漢宮万里の猿ひ長生驪山の有様も是には更に及ぶまし大敷の
役は茂嘗和泉守高陸小敷は更に無其御昌章笛此役は牧地後後守成久地
は荒川去作守正秀根師は夫木主税信ぐ右更は柳沢出羽守保明の女万代姫
とて定りなる已に将軍此光源のなて此庭に志せなひなれは程ゝに答應成し

の身の報ひて行う浪世の俤りもなく流
石お深川の水さへ一葉一砂ぢいお業として世を渡る平別派人小山田弥市
といへる横識を以ます行紀のお徒よ猪坊も知れさる此より今まで檜の板と
月要書よお教人おく指要九功而へ流て
剣術捕りの刀月橋行の業ても仕似世て成今ていお表伴うるの親父分とそ拵と
やとさへ神田前の日氣町へ日永頃く久の名う荒川う京へ移り本郷通り石
さるうえおく用ようて出られましたさい何ぞや当るだけ当るも幸よ面白い
此の先のおものをけ百両出方の大谷五へうち大分の金をかられたて此て先ハ見
通り身お小けう百両の仕合ハ五へ一残うて
て落うえうて待て居れく行のさえこも百両
て御ものへ沙汰のされと余り遅さた分ける多なよ安こまして云をかて差ハ
先いへく触人へそれ被なされてもされまし
ら先祝てもされまをせいと云ふて直ましてと戸和をけてけ
対より小判をお両へ出して浦市う前よ指直ハ両金先ハ何てうや話今度振う
行なましたお祝ひて此ようまをうと云を此て悦へ笑ひ身ハ夜汽の汽や

紀伊国屋文左衛門の身の報ひて行う浪世の俤りもなく流石お深川の水さへ一葉一砂ぢいお業として世を渡る平別派人小山田弥市といへる横識を以ます行紀のお徒よ猪坊も知れさる此より今まで檜の板と月要書よお教人おく指要九功而へ流て剣術捕りの刀月橋行の業ても仕似世て成今ていお表伴うるの親父分とそ拵とやとさへ神田前の日氣町へ日永頃く久の名う荒川う京へ移り本郷通り石さるうえおく用ようて出られましたさい何ぞや当るだけ当るも幸よ面白い此の先のおものをけ百両出方の大谷五へうち大分の金をかられたて此て先ハ見通り身お小けう百両の仕合ハ五へ一残うて
て御ものへ沙汰のされと余り遅さた分ける多なよ安こまして云をかて差ハ先いへく触人へそれ被なされてもされまし
ら先祝てもされまをせいと云ふて直ましてと戸和をけてけ対より小判をお両へ出して浦市う前よ指直ハ両金先ハ何てうや話今度振う行なましたお祝ひて此ようまをうと云を此て悦へ笑ひ身ハ夜汽の汽や

紀伊国屋文左衛門の身の報ひて行う浪世の俤りもなく流石お深川の水さへ一葉一砂ぢいお業として世を渡る平別派人小山田弥市といへる横識を以ます行紀のお徒よ猪坊も知れさる此より今まで檜の板と月要書よお教人おく指要九功而へ流て剣術捕りの刀月橋行の業ても仕似世て成今ていお表伴うるの親父分とそ拵とやとさへ神田前の日氣町へ日永頃く久の名う荒川う京へ移り本郷通り石さるうえおく用ようて出られましたさい何ぞや当るだけ当るも幸よ面白い此の先のおものをけ百両出方の大谷五へうち大分の金をかられたて此て先ハ見通り身お小けう百両の仕合ハ五へ一残うて
て御ものへ沙汰のされと余り遅さた分ける多なよ安こまして云をかて差ハ先いへく触人へそれ被なされてもされまし
ら先祝てもされまをせいと云ふて直ましてと戸和をけてけ対より小判をお両へ出して浦市う前よ指直ハ両金先ハ何てうや話今度振う行なましたお祝ひて此ようまをうと云を此て悦へ笑ひ身ハ夜汽の汽や

紀伊国屋文左衛門の身の報ひて行う浪世の俤りもなく流石お深川の水さへ一葉一砂ぢいお業として世を渡る平別派人小山田弥市といへる横識を以ます行紀のお徒よ猪坊も知れさる此より今まで檜の板と月要書よお教人おく指要九功而へ流て剣術捕りの刀月橋行の業ても仕似世て成今ていお表伴うるの親父分とそ拵とやとさへ神田前の日氣町へ日永頃く久の名う荒川う京へ移り本郷通り石さるうえおく用ようて出られましたさい何ぞや当るだけ当るも幸よ面白い此の先のおものをけ百両出方の大谷五へうち大分の金をかられたて此て先ハ見通り身お小けう百両の仕合ハ五へ一残うて
て御ものへ沙汰のされと余り遅さた分ける多なよ安こまして云をかて差ハ先いへく触人へそれ被なされてもされまし
ら先祝てもされまをせいと云ふて直ましてと戸和をけてけ対より小判をお両へ出して浦市う前よ指直ハ両金先ハ何てうや話今度振う行なましたお祝ひて此ようまをうと云を此て悦へ笑ひ身ハ夜汽の汽や

紀伊国屋文左衛門の身の報ひて行う浪世の俤りもなく流石お深川の水さへ一葉一砂ぢいお業として世を渡る平別派人小山田弥市といへる横識を以ます行紀のお徒よ猪坊も知れさる此より今まで檜の板と月要書よお教人おく指要九功而へ流て剣術捕りの刀月橋行の業ても仕似世て成今ていお表伴うるの親父分とそ拵とやとさへ神田前の日氣町へ日永頃く久の名う荒川う京へ移り本郷通り石さるうえおく用ようて出られましたさい何ぞや当るだけ当るも幸よ面白い此の先のおものをけ百両出方の大谷五へうち大分の金をかられたて此て先ハ見通り身お小けう百両の仕合ハ五へ一残うて
て御ものへ沙汰のされと余り遅さた分ける多なよ安こまして云をかて差ハ先いへく触人へそれ被なされてもされまし
ら先祝てもされまをせいと云ふて直ましてと戸和をけてけ対より小判をお両へ出して浦市う前よ指直ハ両金先ハ何てうや話今度振う行なましたお祝ひて此ようまをうと云を此て悦へ笑ひ身ハ夜汽の汽や

紀伊国屋文左衛門の身の報ひて行う浪世の俤りもなく流石お深川の水さへ一葉一砂ぢいお業として世を渡る平別派人小山田弥市といへる横識を以ます行紀のお徒よ猪坊も知れさる此より今まで檜の板と月要書よお教人おく指要九功而へ流て剣術捕りの刀月橋行の業ても仕似世て成今ていお表伴うるの親父分とそ拵とやとさへ神田前の日氣町へ日永頃く久の名う荒川う京へ移り本郷通り石さるうえおく用ようて出られましたさい何ぞや当るだけ当るも幸よ面白い此の先のおものをけ百両出方の大谷五へうち大分の金をかられたて此て先ハ見通り身お小けう百両の仕合ハ五へ一残うて
て御ものへ沙汰のされと余り遅さた分ける多なよ安こまして云をかて差ハ先いへく触人へそれ被なされてもされまし
ら先祝てもされまをせいと云ふて直ましてと戸和をけてけ対より小判をお両へ出して浦市う前よ指直ハ両金先ハ何てうや話今度振う行なましたお祝ひて此ようまをうと云を此て悦へ笑ひ身ハ夜汽の汽や

紀伊国屋文左衛門の身の報ひて行う浪世の俤りもなく流石お深川の水さへ一葉一砂ぢいお業として世を渡る平別派人小山田弥市といへる横識を以ます行紀のお徒よ猪坊も知れさる此より今まで檜の板と月要書よお教人おく指要九功而へ流て剣術捕りの刀月橋行の業ても仕似世て成今ていお表伴うるの親父分とそ拵とやとさへ神田前の日氣町へ日永頃く久の名う荒川う京へ移り本郷通り石さるうえおく用ようて出られましたさい何ぞや当るだけ当るも幸よ面白い此の先のおものをけ百両出方の大谷五へうち大分の金をかられたて此て先ハ見通り身お小けう百両の仕合ハ五へ一残うて
て御ものへ沙汰のされと余り遅さた分ける多なよ安こまして云をかて差ハ先いへく触人へそれ被なされてもされまし
ら先祝てもされまをせいと云ふて直ましてと戸和をけてけ対より小判をお両へ出して浦市う前よ指直ハ両金先ハ何てうや話今度振う行なましたお祝ひて此ようまをうと云を此て悦へ笑ひ身ハ夜汽の汽や

紀伊国屋文左衛門の身の報ひて行う浪世の俤りもなく流石お深川の水さへ一葉一砂ぢいお業として世を渡る平別派人小山田弥市といへる横識を以ます行紀のお徒よ猪坊も知れさる此より今まで檜の板と月要書よお教人おく指要九功而へ流て剣術捕りの刀月橋行の業ても仕似世て成今ていお表伴うるの親父分とそ拵とやとさへ神田前の日氣町へ日永頃く久の名う荒川う京へ移り本郷通り石さるうえおく用ようて出られましたさい何ぞや当るだけ当るも幸よ面白い此の先のおものをけ百両出方の大谷五へうち大分の金をかられたて此て先ハ見通り身お小けう百両の仕合ハ五へ一残うて
て御ものへ沙汰のされと余り遅さた分ける多なよ安こまして云をかて差ハ先いへく触人へそれ被なされてもされまし
ら先祝てもされまをせいと云ふて直ましてと戸和をけてけ対より小判をお両へ出して浦市う前よ指直ハ両金先ハ何てうや話今度振う行なましたお祝ひて此ようまをうと云を此て悦へ笑ひ身ハ夜汽の汽や

人去ても士の女房亭主の為ならば根錆も男と云せもあへず脱平均抜くより速く
只一討に息絶ゆる隙も刀の血拭ひ拭き布の金の包を取て抜遣いぬ是百両
示して懐中し何事もかまひ添付て表へ出る隣傍ハ亭主の平蔵殿ハ掛り先ハ
御前役の維れかか御従行と思て隙らんと始るハ維れ行いの御座家ハ亭主役業
内の事め先ハ見文行くハたれ供らんヤレ女子ハととりせイサ内へ入と内へ入る所を膝
手前しと後か大聚衆に切離し隙も如表へ出しる森と喰け血を続
ど様先ゆういせ気ら方へ行今一狭去てくきん一時と里犬乞り閙るし手に此らく
走り小脇に挟んで小ぐやし此所ハ八百八町芝のちてらの神田の鹿や嗤くと須田町
比いせやに来りて今夫房に在めさか時極ハ久敷逐ふいら先く盗して目前たハ於
け日ハ維南ひらくらさともて取にし身去ハ時日亦後ての不仕合せ我死ちと安心
まら殺に胴七の歩行や極に金をせ百両お結先れとの不足けに云出せハ高笥さ
に来やたく大概らしく先より今心と頃ハ其のすてとわかひ今夜か々側
よろとして肝を屈し先ハ迷武士方の出品も見けかく今借ハいうしたまてた欣
太夫ハのすてハ如さりませぬと云を承知く忘る事なく只後今らさ十両庭貝
とて弐百両今日のうせ添て持方今宵の側ハ背人本町裏の果抜やれと尼

店の澤衛や大家ハ寝所を捌かれ方一胴ら斎くら綱手て縫んで奴仕舞
客り熱ハ多分夜中に咄ても借用済むハ此方云てつき一分ら立戸
さぬ筆る知らねとおいやれハ為ら恐ろしく刀をひねり出しかさまに掛りて角目
立ハ此勢に結餘と思られ成従行し迎金子ハ手に入ましたれハ七寸知て坐り
を弁ハ手合悪敷下地ら犢在の手より手拭取理合の借金買掛りの償ハ済彼
先よきひ思召しましてかく出掛り家にはさりませと内証に高また家へ
此判保の私ら義にて内証ハ金借成て本能君下されませと始るいく掛取
し後を呆させと後か呂ひらけ知き浅聚御夫女房子女ハ見と見てを不悲
しわと泣させけ二息せ立さら色木茂今らたらいく斜眼出して抜刀を悴
く溜同し掛取の列むしと完いて先もれ百両余り打債て仕合言と懐
中し花火と吸消して表の方へ出掛れハ今の声た隣家の衆倒す庭へんと見
出て門の戸開て内を見れハ若周り体布ハ亭ら表へ出次よしと脇れて
を隠て先り行頭ハ神と知れ山とかれ行く知りと迷て行く夜杖内月夜の町ま
行而へ芝神明前の日影町谷を大ら月行衛夜中知れぬ急成る歳役所行衙
とまり町内に借宅行なの宰人元荒川平蔵夫婦の人と今宵曽とと切

教し一命をたすけて迎ふる神よあるべ
まもるとて云ふべし又私なき神田原田町の町人をてはさりまもる今夕初夜ころ
町内伊勢屋の前より深川辺の源人元小山田添市ともらん口人の切殺し
今ふを奪ふて逃げ行ふ跡を追ふて捕手の人数を出しかたく逃げ
を見かけ死骸深川の小山添市ふ方へ捕手の人数を出しかたく逃げ
ふ所ふ女房ふ云ふ跡別いふ様子ふ有ふ女房ふ云ふ跡別いふ様子ふ有ふ
日新町原田町両所の町人隣ふの者ふ云ふ伊勢やふ云ふ妻ふ云ふ京ふされて要田
と申ふ者ふ跡ふ追ふて荒川辺ふ迄ふ追ふ跡ふ云ふ口入をふれふん大名方へ
ふ行ふ大ふ云ふ今ふ云ふ跡ふ云ふ跡ふ云ふ跡ふ云ふ跡ふ云ふ跡ふ云ふ跡ふ
を報告しふる様ふ云ふ跡ふ云ふ跡ふ云ふ跡ふ云ふ跡ふ云ふ跡ふ云ふ跡ふ
ふ跡ふ云ふ跡ふ云ふ跡ふ云ふ跡ふ云ふ跡ふ云ふ跡ふ云ふ跡ふ云ふ跡ふ
ふ跡ふ云ふ跡ふ云ふ跡ふ云ふ跡ふ云ふ跡ふ云ふ跡ふ云ふ跡ふ云ふ跡ふ
ふ跡ふ云ふ跡ふ云ふ跡ふ云ふ跡ふ云ふ跡ふ云ふ跡ふ云ふ跡ふ云ふ跡ふ
ふ跡ふ云ふ跡ふ云ふ跡ふ云ふ跡ふ云ふ跡ふ云ふ跡ふ云ふ跡ふ云ふ跡ふ

五十一俗称威兵将軍を誅しまつり

紀伊九年従二位に叙し男女の嬉楽ふ事に嗅髪を懐くして来拔兵士の副
まれしうと生をえてうを死ふ主の為ふまふを礼しまふと云ふ忠節
其剣しまふ拔ふ将軍徳吉公ふ方代娘ふ也ふ嫁ふ
ふ光寓ふ拔ふ保ふ威勢並強大ふ威
らふ御給の吉兵ふ山のふく第ふ其ふ
るおふるうふくの統轄ふ所謂其ふ
皇国ふ神ふ山牧地領ふ威ふ夫ふ
ふ又一俗ふ云ふ護持院大僧正ふ海也ふ
ふて将軍ふ権ふの二ふ
ふの大名ふ従ふ服ふ
まんふ殺ふふ巧ふ保ふ
家ふ五ふ祖家康公ふ世ふ
云ふ五ふの内ふ天下ふ
猪札ふ免又家康公ふ
人ふ俗ふ其ふ

の孫を交換るといへども其魂魄たるに依て能くと立所し護持院といふ魔法
威勢比僧を誇らいまゝ村の印旗の神の威力を加へ給ひて方便を巡し尚五代
目の將軍の此意に入る孫をたゞして威を震ひ武田の紋の幸菱に花を咲せて
花菱の紋を附け信玄父子から生國の早斐玉府中を居城と定て信玄父子から
吊軍に天下を覆さんと欲せるの清和源氏松平の天下も是張りまやと心を
軍は肝を冷して始まりなるを上鍛林或信六方石の花の神田橋の間にて出り
八町余も有大屋敷を申給りて此成此地色の為にとて此庄敷の目の庭前に東海
道五十三次の庄中の北京を作り立歴々の大谷旗本の異方を第国もここや
の御女に仕立帝前宮の有し姿と成 綜吾公を始大谷脆近の軍は旅行縢に
菱笠扶菓鞋にて姿を略し若は男女入れての在兵は前代未聞の有様にて
帝王の奢を寵給ひ仁義をも礼をもかへり見ないを世の噂に此心を付られ其数
多の艶女を拓き集て錦帳を幕張し梅と桜との作り花の枝に分寸を定め
手に立分れて戦ふ打落されし花を拾ひ取る女には酒をとゝ
て相ひ礼て辞外聖も姿も取礼しけるを見ないて笑の程としかふ是を此流の
花軍と名付無度戦はしめて一兵と成しかへり其は細く清らう成を撰んで生

給の第衣斗を悉せて命水の辺にて命踊らせ多は色白く紀る女斗を数多集
めて此庄の目付を囲ませて此を防記暖卫を去せかふ是を肉陣と号せらる是ホ
の此在兵皆万代姫を歴させかふ此方便之往古より和漢とも色に逆ひて国を亡
し身を失ふ人かりこれ去は麋姉一変笑て幽王玉を傾け玉妃侍に媚て玄宗
世を失ひかふ大公望の兵書に曰利を好む者には我恐を与へて是を逆はせ之を好む
者には美女を与へて是を逆はせといへども諫の意を考へ柳沢に同年お来むる邦欲
の事を逆て綜吾公には酒色をもとめ方りて此意を礼さしめて天下を覆さんと防む保明心の座て怖変

万民困窮 安生類此懈こゝす

文國家の兵亡を視るには政の苦悪観るに去り政の苦悪を見るには賢臣の用捨
を観るに不苦去は微子去て殷の代傾き范増罪せられて楚王亡たり今武大宅
老中の職有といへども有名無実にして天下の裁判皆柳沢出羽守の徇中方寸の
邪計に出たり徳中保明の下知を更て初定せり横原近江守思慮を巡し金銀の
吹替を知れ七宝才一の金銀に多交り物を入て位を悪変なれ下々の者たる金銀を
抜ぬれは此仕立は碌なり上の此事同を様て如何金銀の用を悪変するは眼前柳沢
荻原の屋敷金師同罪之天下の何は詰みて有者のみきれは金銀かく万民不捨

も毎度拷問して責たりける事責の苦しさ悲しさに堪兼て先なりけれと皆を少
に実て暫時の苦患を逃んと自状せんと偽通ハ責る役人たハ委細の訳を聞ひ
給役落忌せりと理不尽に罪に落して不敢の此仕事に行ふ事要子春屋の
艱き悲しミ呼ふ事ハさなからう叫喚地獄のことくん此生類此憐ミの義を作ひら
通てより諸役人見ゆ為に初役に隙なし万民たよいう成すゝ御来つゝんと薄氷を
踏心地して三分の令服を貰し断ゝの困窮辛苦云ふ斗なきすたん時に強きハ
断ゝ出来ゝ良ハ妻子諸臣異ハ打捨亜親夫ハ囲に入て前ひ退子夫ハ懐き抱て逃
行方知殺万人の驅役云義に尽し極し熱て富類故に人目の命をこれなく
去其殺を志ゝ此獄を率て人を喰ハ志むとハ行る世時を云成へし生類故に人目
の命をこれハ非臣とハ知なからう様ゝ募て此すをとめ事る旬称今も将軍の政臣
の正しからさる根に熱と万民に踈ませて亜此後に柳沢ゝ慈悲の仕亜と云相し
生類を敬して万民に知もハ付ッせる巧の一ッと呼へし此かゝも非臣の裁判仕亜
等詞にも中ゝ尽しりたし

此大醫者ミす

此の流と人の身ハ行清定めぬ世の習其此神田のもとに町に乞食を志て居る
不助と云美者を元来家列堺の者成しゝ大坂臣領町小西何某と云し某臣の
手代奉公を勤し内若年の色黒相ひよる人の金を引負せし故其不足銀を
償ハんと某種物の買金せしに大なりを更見彼所の手合遠身の亜所此者
故に経別しなるの町を見廃して江戸の神田にかの不縁の在し故史を頼
にありしに心当の人さへも身上不如意に成し故奥列仙臺の戸へ拝に行しと呼
て力を落しぬ用意の路銀も無ひ果し給戸なきに其者の小家の門を洒掃除
し断ゝ町内の人ゝの情に依て乞食として誉し居たりしゝ後ハ別際も立り
て其町内の此大祖臣の護と云付られて勤しゝ其切長町内の大病年付き一切
喰物をも喰されハ町中大に驚き強きて此事行亜へ得なる処に陸分大切に保養仕
へきなると給付られ万一其大死する者なるハ町の者たと急度曲事申付へしと仰出
さるゝ故町中殘らず寄合此の和に強動し医師を追て療治を頼ぬまゝ大の療治
ハ不得に成と何事の医者も辞退されハ給戸尽て町中ハ違法に誉て居なる処に件の
平助寄合の場へ居ゆ云なる様ハ私かゝ存寄の某此ゝへハ此大様へ持上戸て見戸
家と云出なる町人も見を使居ゝ大すの此大様に彼未ことゝきの頃ゝ愛者の指す
某ハ用ひうとし急やせん角やと廃忍して町の名主ハ此地を呼て江戸中の医者充

を粗にて茂菜をくらく人の今きこゝは是死を論ずるよも及ばれ薮よも功の者と
云喩(タヽヱ)もあるは絶糧絶命なる菜を用ひて見ん眞かに付ひ有給仕合と存ずる事
尽しと云はれは平助最て懐中分包し菜九出し此大様の此口を発さて呑せ申
せてもめ仰成奇妙の雪菜までやまさらん暫時の事よ此快気なて尾を弁振て今日よ
喰付ゆるよこそ所中の悦大方なるに出来たり平助否平助及平助仮此手柄と名
主迄ゆ振付ゆて持賞(ハヤ)を此す隣町の時よ成江戸の町中に当く流布実彼所なり
腐犬の此医者様此見舞て其下しと迎の為ゆ後ゆは余物に成員夜時のなき
れは弟子数十人を百絶へ利旅篭町に庄浦を仕様(ツラヘ)武蔵付の大会関御犬医者師
今川平祐及と奔走(ボンソ)に後ゆは所城内へも此百なて此飼犬の療治を勤ゆるよ百発
百中の妙菜一足とても活せしと云ゆ今き故よ尚時は米井今大路忌本市の典
菜庄分厳(替)く六枚肴の大肴板六尺人若黨菓屋九年を経ても志て今を能ず
俄分限者と成よなり

尚 総吉公御他界の後は生気此懈ミの此所活も此停止るよ後て犬医者も今
用よ成し茂平助よ此菜味を尋ゆるよ石膏人屎赤小豆犬の性は大熱の
拘成故此三味の寒菜を務ゆして此ゆて用ひしと語りしと

天下悟吳妾富士山焼ゆ

偉(ツヽイ)なるは武将の徳函徒を元して天下を一統し給れる時は文藝を以て役冠とし
私なく時は武術を以て功樞(コウスウ)とせり柳我朝征夷大将軍の高職なるゆて下の政
務を捨りに関り玉象兵馬の権を執諸将のよよ産しかふは私なるも皆是天
運の移る志むる然之称るよ尚将軍総吉公の此身持天下万民の衰憩を
ゆを露ゆまも此宗よ悪分ゆは此淫湯の二ツよ弱れかふよ後て万ゆは皆柳
沢出羽なると護持院僧正ゆ心の後の政治とは成くなりぬ故て万民の頭き
積て天変地悟と成ゆ往昔より其例多し称るよ志ゆよりよ淫浦より
安房相模の海きよ志て海の鳴ゆ月を織て此を次よ奇異の雲殿をれ
恐是光り拘木の変異多くなる様と云て海きよ高櫓を造りて是よ人を登
せて此方を強さ世繼成ゆを異ゆ変云上志て是此ゆよ此を将軍の此等
体安全の為とて護持院ゆ斗と志て営中に櫓を備りて護摩を修し其
祈禱料と志て将軍家は勿論諸大名公家本より多分の今年を貪りて
夫痩き乾坤の事よ此の悟吳ゆるゆ仰て陰変ゆ有や天変地悟の異ひ
三千世界の内此日本の地斗に限んや猶更将軍の此身一人斗よも尚まし係

天下安全の為として行法をなし護摩を修せハ忽家へ入て深く云の如く身汁
に依りて安倍を引ハ終に家をすと祠を並へて其上し其の心を遂し生るる
呉竭虚舎の御めより後日の光ハ彼夢僧護持院の謀る所となりて工ミ出
して其を得る迄事る其室虚ニ余して機程の乱ハ起せて出る奥方の
女中を喰殺し或ハ夜更て城中ニ大鉄の戸ニて踊の音をれし諸人を悩る
依ニ以天生乱の障の法を修して御法を厳にし是れハ誰云ても別在る人の命数ニ源業
りて妖をなすと或時ハ城内より此様のこし時何者とも知らぬ大霊物大蛇へ上りて鳴キ
をこ合揚て果て八寒と号ひて何ともなく行くなりけりせぬ其者お横へ入て自ら
大と見せしぬ又ハ天狗の来りて田舎をさせし彼の怪異今此時ニ在ける
別るて死人の悉卿しかるハ富士山の未の方深き見所よりの後光にて時動きる事験
しく其近辺ハ白綿江戸中も二日二夜か間ハ灰降りて日月星辰の光をかくし
而て曖昧夜のことし彼る天変地怪の事共聞るれハ世上も皆に云触し誠
中に怪異共多く人々心ニ危ミを知れ其ニ別而て富士山の焼ける事ハ是非すに
推れとて天文の博士渋川春海衛門白命有て考させられての趣
兄そ乱の相なる也と云ふよりて依て高家中條大和守康隆を以て上使とし

帝都ニ奏聞有て元禄の年号を改元ましまして宝永と改させられける所る
依夫于続ありに依て将軍綱吉卿病ニ成せ給ふ折ふしニ柳沢ら計らひとして
救ありて江戸中を賑はしめんとて救ニ住へしと銘を出し家中町々の踊ハ為
諸人参の蔦者浄瑠璃操（カラクリ）歌舞伎等の芝居市町宮寺なと賑はせける
様ニ笠鉾流され是ハ江戸中の祈禱なる衰微せり剣へ近きハ合戦
のことらんと此儀を仕出せハ何とも知らぬ祝様の扇人ハ金銀衣乳を行へて施せ
近近て人心の高る堺又盤昌の町家者ハ大名旗本の屋
敷をも合衆不申し又ハ云をしかんとなて辺去門跡させ徳方ニ柳沢ら屋敷を構へ
て世を渡ニまて其上諸方よりの寄内給ハ貨を返して取行へ用金の募屋方
ク才か江戸中の町人ニ金銀を出させて高利を元自然花麻沸すなれハ権威
をもつて町中か無へさせて其上又お入し町人ニ證文紙血判をさせて銅を以て金子の
手本を花入宮を板多枚させ此等ニ小判を偽て運窮ニ行ふの甲府へ出し城中
に隠して行へ出其外世界の金子を集り込んと種々に動兵を以て此城内
小屋示の入用金も萩原重秀をとさせて川村瑞見と云者を上方ニ登し淀
列大坂の川筋ニ及ひ城の東の方か河内地へ堀切らせて但馬の事氣別堺の如よ

水戸家を亡ぼさんと欲し大和川と号して往来の船の水勢を変ぜ大分の金銀を費さしむ公儀より八代入用として数百万金を費して元と御沢の願ひとして又富士山を掘りし砂降ること数日江戸市中に満ち人家埋没に及ひて夜ふけ人馬絶て往来なりし抔万民苦しむに及ひて公儀より救ひ給ふ事なし又慶長元和の度忠七と云町人ご用金を献じ其外諸国の町人ご用金を献じ大抵を又ご賜て通用せよとて御墨付を下されしに天下の万民皆通用仕候ゆへ遂に及ひて十分の一ほご通用せざるに至り候ゆへ忠七ご賜りし御墨付を取返し其外諸国の町人の預り金を残らず返済して大抵半分ほど無くなりたり

御沢如何なる一味ご大名と御沢保ちよう謀ると云人多く有ける由

日光の後人松平右京亮殿預り給ふや否や御尋御沢保ちよう謀ると云人多く有ける由

又白服(ニフクニ)人ごは迎日城ごまでき候ご悦ご申楽ごの二つを

もてまつる代ご成て武士ごも仁義も捨り果候ゆへ世上ハ次第に困窮ご大名旗本ごハ用捨なく課役の多給あごを以て金銀を費さしむ又ハ御沢ご初メ五十一倍の葉う銀納に九ごして困窮させ天下の政ごを深ませ天皓元も記まう為将軍の出代毎に御沢保ちよう礼ご称ごして諸人ご思ひせて千後か程うち礼ごを受ごつごまごの方便なり礼の儀ハ御玉串に忍(シノ)ぶるごいふ古ごの名(カタキ)称ごして金百疋ごを備るの出納ごいふ事ハ威ごを振ひ金の属(ヤカラ)ハ威ごを奪ごいふ事ハ御沢保ちよう謀ると云人の諸侯貧窮ごを饒ごいふ事ハ御沢保ちよう謀ると云人の諸侯貧窮ごを饒ごいふ事ハ

武具馬具ご化今ご限ご云ごて送り物ごして回心させ又ハ従ハざる輩(ともがら)ごを遠ざけ欲ご迷せて仮よ一味ごせんご謀る一味従ハざる輩の大抵の大名にハ後嘗和睦ごを添て送り物ごして回心させ又ハ従ハざる輩(ともがら)ごを遠ざけ欲ご迷せて仮よ一味ごせんご謀る一味従

成年ごも経利ごを加へ宰相綱紀の病(ヤマヒ)ごして細川越中守(ママ)綱利(ママ)ごを悩ごする中将吉保ごを尊ごして

貝ごを粧ごと欲ごを捨ごて尊ごひ奉ごて松平肥後守保科正

容の男久ごの代ご成て一味ごせんごて松平兵部大輔吉保ごを

称ごして福井の少将吉保ごて一味ごせんごて松平兵部大輔吉保ごを

ごし福井父ごを山海の珍味ごを以て毎日進食ごせんごて欲

(三十五丁裏)

家康公より播磨に此内一家たり何そや家臣各節の柳沢の姫を娶んやとて固辞し
大小名の中にては柳沢と不和の案もあり又多分之井伊掃部頭此事共を男女共
父子相平隠居致す室を掃部頭政邦戸田采女正氏定之に柳沢出羽守と
争ひ仁勇を尽すに此に其外大小名の心底を窺ひ彼とは引入見をはたらし一味
させんと謀略に一味徒党の其中にも別志て細川越中守綱利は平藤五十
位方へ内々志を知り志て一国一城の主役御座候に柳沢出羽守
へ人々に絶ての御倍追従所役庶きまゝ其外別志て見くるしかりける徒党の
面々会合に食は毎夜夜食を接て柳沢の屋敷へ送り出羽守武運長久の
為とて護持院の法象の僧月輪院にて祈祷をさせ深夜には夜食の代に祈祷料
抔と名付て皆代銀にて送りける是に依て死人の数多と成て夜食銀中と呼
名せり将軍柳沢の宅へ此成の食は掃手に抔とて世話をし追従する者は衣
札保昭の屋敷に越へと云ひ嫌しける屋敷心底之此細川越への交代も金銀の費を
厭ひて保昭を粗にせしする者ども此越北の丸の此手傳を頼てせへき振ハ如き苦成
を見れ柳沢の巧まて内証より今銀の入用を皆如何為方なをいして表向は手傳
と云偽りて此小の丸の黄金の黄金を柳沢と細川の心底に一揆を致の仕方なりとて

矢本主税係云英改易之事

貝鰒に二見の浦の松の葉は前法に見る通り此東西行上人の貝遊百合歌仙貝
なと皆此浦に西盛室貝の蓮に離るゝ余情の望へ寄し抱も将軍綱吉公内
を好ませ給ひ陸奥能代の名を能子を無雪の形に造らせて活かれる此代の所に
拵ひ給へり去は住首業和の帝は黄成色を愛し給へは天下の人皆是に止りて余人
を用ひ給へ今将軍綱吉公大笑の玉巵をは傾けさせ給へは猶至の飽を尋求て全
箱に塞て斉藤とよせ伊勢清や久次かけて松原を筆に尽て盛り梅垣對雪
の内室方の献上に柳此貝に酒の入すす七合ゑ久に志て深淵と名付られて酒共に
入せ給ふ又袖志の浦の玉帯を尋求しとして八合ゑ久人の飽共室に春の海辺の位
吉を思うせ後堂和歌雪此内室の若上られ是は基此橡姫能物し百歳淵と
銘を付られ二つの杯盞と斜なるに此家老と云は橡姫を諸
ひ阿部の案大酒此合手と成て内侍脇胃虚の病に出勤怠慢仕り故去る
子西の古祝の銘に曰筆墨は御とりて齢積くく祝は勤らさる故に事を保と
うや此家の例用人矢本主税信之は其素性横柄の家を出る者成た綱吉公の
此志に合ひ不思議に此古参し有てより是夜此例を立られ勤仕せしう行解力有

有時ハ以て文を学ふこの聖賢の教に従ひ事の順にそも有時ハ唯学文をのこそ
志ざりける韓信ハ武士も張良ハ文知にきハ又知ると武藝ハ左のこ好まれ志
て孔孟の道を学ひ弟子学の温奥を探り切瑞隊慶の功積り勇も又兼後へ忠
義金石のごとく成壮士之極なるに尚将軍に此世嗣のまきまきなる故此養君に付ては
礼遂の基ひ先成やせんと尚時の大志職井伊掃部頭重興と密談し給ひ云へ
女色を進めまゐり此流を徴け面斗の存念成しに思ひのハか荒淫に成らせなひ
百餘人の美人を此庭の侍に重なひ夜宴乱舞に溺きさせなひ剣
へ此極ハ此心も乱させなふ極に見へさせなふ故主税ハ宣親此すを聴き思ふに付け
或時此前へ居出て申上するハ其此代を保せなひし其始めハ此身持も固く深く
せなひ利世安民の此すのこを此心に怒りさせられ其時更此母堂桂昌院殿へ此孝
心の義斗を思ひ百萬させなひしに此を斗ハ大酒を百上させられ故多の婬女に琴
三体線を門せ宣親の別も在まきなる此極ハ古人の曰諸の戯乗ハ皆心を乱し
此を元王の媒人を中に色欲と大酒とを第一とする此取り傳へて此人婬声
美色ハ人を感し安し耳娯則ハ情に心驕則ハ態にまへらしたとハ禮伊川先生
の箴の語にて此人君と臣と徳同しき刻ハ栄へ君臣徳同らしさる刻ハ国家

衰て其身を元初を見唯苦の一ゝ者上一人苦なれハ元人其徳に馴付不告成時ハ
万民其令に従ハ其去ハ苦人の昌へる事ハ春の苑の草木にたとへ悪人の亡なる
事ハ刀を磨砥のごとく日々かけ損して終に全きすをはしとかや角此不農生
滿らせなひなるハ終ハ此遠例の程先お成りさんやと釣言此義を聴家を存
義此能を学ひ百上させられ婬酒の道を此をさけ成下されなハ第一ハ天下万民
の為次にハ此母堂の此主孝を成りさん極るに此例をお勅に脆近の元は尚前
此言に合ひまるをのこ忠義と存せられ一意の此諫云を申上する者の此庭なるに
故余り聴家を存忠をよろへり見て云とし事なりと思入て平伏に給ひ云ふ
此前退従と云る族にハ宮多く私を忘て忠を存し諫云まる者ハなしと古語に
准へての廣言極もく学すん汝ハ学文を好の此兼て学及ひしから天晴出来
しとり意和ん汝ホことき に詞を黄ハ無益なれと学文自慢の面悪に云て
学さん夫人偏に不孝の果敬多なることいへた世嗣なきを以て不孝の第一とにと孝
経に所然とり極るに来に世嗣の男子無き故に其流を求んか為に数多の女を
思りに百体に見ハ来る心より発る義に非に兼て汝を始め脆近の輩ハ連て
をとる故忠言し他犯戒を破りて汝ホ諫に従ひし刻に今以て此義を刻し

謂れハ前後の云樂ありて遠せり故に酒と別なるの称なれハ是を以て前漢書
食貨志ニ曰夫塩ハ食肴の将酒ハ百薬の長と云へり白楽天東方朔李
太白廬山の三笑竹林の七賢ハ其外唐玄宗郭の賢人就ひて酒の頌を作り醉
聖の詩数多有又万葉集の歌に
賢しと云ものよりも酒呑て醉泣するこそまさりたるらし既に居て語らひするハ酒
呑て醉泣するよりなるらん哉其上酒ハ賓主の娯ひを交へ隣里の好を結ひ血脈を
まさる物なれハ拵へきまさらん月雪花紅葉の樂を成すも酒にて有る事を親しむ
巡りて是に益れるハ百薬の首なりし仮令かゝる不老長生とまなふものも薬石の
徳なるか待居に依て其身の齢を百余歳迄長からしめんと思ふに役命に長し
も云を以て安穏の薬を飲み安穏長命ニ至る事を能保つハ毋慈桂昌院殿への至
孝を以て万民を蓄育の為ハ四海の浪も静まりて萬く治る御代なれハ九州の萬
ら政をして守る是れより其上御代出来るに依りて万国の宝物を寄せハ先ハ天
下ハ恭平なりんと就の中の宝さへ宝さる孫云る分なりと何有至穏福て
来り四境を随しまするハ守り云に至て知る此云なりて此等幹の此侍をもまて守る事にて至

仕るなん酒ハ百薬の長なりとハいへ世に大酒ニ長く偉き備ふ法りてハ病根と成と医
家にも戒めたれハ是黄帝ハ酒を以て僻と去れハ人の病根と成の是家にも病の家にも
又夏后氏ハ酒を為て儀狄を疎む周公旦ハ酒誥を作りて国氏を禁め此君に
のこ酒を呑めと宣へて悪く衰行も泥酒もて身を亡し家を破る其例なき今から
られ戒めを戒めさるへきもの也先ハ佳稀杯飲先孔の指め也なり是に何そ之れを挽
んやされとも量なくて孔ニ及ハれと魯論にて見へて汝之又張安世と云人ハ節宿の
碑にて厳しくも慎みて居るを宜ちし西吉ハ御吏の碑にて丞相の車の上にも吐と碑と
の失へ是を以て士を撰へりけると云く罪せんと漢書に見へてけ又佛書にハ大蔵一覧ニ
酒を呑者に三十五の失へと揚般若論毘婆娑論まても大に酒を戒むも別して
梵網経にハ酒を飲ものる者ハ五百世の間手無き生る何と況や自飲罪をや
と佛ハ儀ひのふ又孟子離婁下にも禹ハ旨酒を悪むて善言を好むと注に曰戦国策
に曰儀狄を作る禹飲而之甘し是にて曰後世必に酒を以て其国を亡さん者有りんと
疏ありハ兼好法師も徒然草に下戸ならぬこそ男ハ能けれと書しもかし八能大
酒ハ失と多しにの心を合て書せる也徒然草にも見ゆる所は御なる思ひの為れ偽悪らく
にかく宛ハ百とられても能く尽る大酒の変ハ困し此様と成しら下なも

有りこく有しまるへし次に護持院僧正の此事算処命の行のすゝ忍かう
曾るこそ忘れらるゝ此事に此座に針灸菓まて病を治療仕るは理之行儀かけ
まて治せるは妙之捕へ難く理は捕へとゝ見るゝとゝきの内かれは妙を捕て服前
に理を識るを達人と智慧と申はへし口に喝へ形を凝志てかけ行儀之と心得るは
假令其人特識宏才にても愚人に紛かるゝ事し死生命有冨貴天に有人君の
事命は各其身に依て定まる也然るに秦の始皇帝天下を掌に握り給ひ
鈌樂を寵めかゝるに付きても唯有待の此命に限り有すを歎きかひ如何よも
志て蓬莱にて不死の菓を求て千秋万歳の宝祐を持んと思し如に徐福文
成と云二人の計案者を始皇帝の愚に立しまゝを傳へ此不死の菓を求
る術を有したるを云上されは帝限りなく悦ひかひて先両人の術者に三分の
祿を下され二人の僧道士の詞に従ひ大私を捧させかひて蓬莱宮へ不死の菓
を求まをはれぬ忍かりし此護持院を主祝めの服より見申はへは彼徐福の軍に
お見へ申はて也其上此僧正各海は魔術と聞く仙術とやらんを行はれ其仙
術には天仙地仙の分ち有て長生を持す彭祖の如く地を引かへて見るすは貴
長房のことし宝を飛行し玉を潜り罌粟に須弥を入大海を再に涌へ移術に

れを入て籠を鍋行の筒の見る中に牡丹の苑を咲せ斉妙多量の術をかして
人目を驚きの座を戦国の末漢の代に至りて流行元人皆此斉術に化されぬ
聖人の説には人は地に依て有生せる者かれは多氣のとゝく宝をかたり重に家る
と云理は今すゝ之と用ひかゝれは皆是成程欲深き者天命を知られ定まれる事
命を求く持たんと是初成志の好むことにて此之是又天変地怪の行のすゝ彼僧正
抑の行らるゝ義相似の事猶く存ずる之史天文を見て時変を察し人文を観
て天下を化成せるとは聖賢君子の政成をや又生氣は懐の此法度に依て富類
の為に人君の命を断せかふ此すゝ是又大成此祭の此法度とを存ず我人を害せ
れは是人亦我を害にと云へり非是の行を此物の命を断行は其報速にして其
身を亡にす神明の罰佛の因果の理報の形に従ふことし其は害の出るに等
しきし報ひ君の此身に当りかゝる事何せんと又冨貴の驕り出るに後行て撓威
を振ふは皆人の尋常にて此座にとは申せ此当時柳沢の撓勢は将軍の此威光
にも増りなて已に追従性薄といふも軍には功今き者にも祿を申かへ結絡とせ
さる諸侯旗本等は功有を謬云を志て源時の課役を申付る是に依て内心に恨
を含む軍も多く此座有居く此之人西咲の中に刀を懸とす喩も此座に人心の

まだ若年なれば柳沢出羽守追従と出て依怙とも追もなりし尚将軍の猶君にて
ましませば紀州中納言綱教卿へ御譲りあらんやと云出しに酒井雅楽
頭は此事如何とて左馬頭殿の御連合なれば綱教卿へ御後を継せ奉らんと有る
敬ふ所なれども先祖権現公兼ての御遺言に頼むべき所は尾州中納言殿
又は水戸家なりとて夫にては何とも云ふべきに依て紀州殿にては一変
わかれし時に戸田山城守進み出て候の仰らる何れも疑ふ程なきと云ふべし
ら退出して其案を廻しけるに先将軍綱吉公御病気重く実子の御座なき
故則家宣公の才を甲府宰相綱豊公此代を譲らせらるゝと定めし式部重
公は此病身に渡らせ給ふ程に依て御辞退ましまし故甲府の御兄君館林宰相
綱吉公（先将軍の御弟也）は天下を御相続ありしに於ては甲府綱重公の御子綱豊卿は
公方綱吉公の御猶子君と別にして綱重公に対して御理を合して御仲なれば甲府
宰相左馬頭綱重公の御子宰相綱豊卿と御兄弟と称しられ御血脈の近さこそ
云ふ先規の御筋よりならんやと云はれば柳沢出羽守是を以て甲府綱豊卿を成
候ては御血脈の近き云ふ紀州綱教卿は現在の聟君之婿なり又同統成るに
紀州を差置甲府へ天下を御譲り有る事は此保明に於ては其意を得ずとて出張せ

臭に致す倚て余人に云はせ斥候を見ん出し尚も荒年に見へけるは其時大老井伊
掃部頭は双方の論を聞何分内々それの評議は各の存分を述べさせ追ての事
なりて此件の事一統に上聞に達しける上御厳命の下る事に任せられて御沙
へかうんと裁判せられける付其日の評議は止みにけり

甲府綱豊卿を呪咀せし件根源権現にあり

越の王勾践は会稽の恥を偏に志て卑に勾践の讐を復す曹沫三敗の辱に死せんで
已てに魯国の恥を雪ぐ事かなや我朝源家中興の英雄征夷大将軍家康公
初年の御かなしみの苦難に心身を凝しかひ則て慶長年に至り先代家の化天下で
名に移れし所以に田後長居我弱小からぬ辱しめを思ひ合ひ終に大坂を討亡
し今日本を手に握り武威の耀す一天下に普く率徒の勢ひ四海を治めて累
代の源氏の嫡運家に寄付五代に相続せし松平の天下なり萬未も此の如く
征夷の此先祖大権現家康公の在世の御苦労は倫言の此後までに不用の指を
第く君と名付けの中に尚家の六代目の御子息の御筋は甲府尾州紀州
三家の内に天下何方へか渡り申すべしとも古今の例へに洛に隔て甲府
是は綱吉公弟にて御内意なれば実子の御露姫君の御聟君なれば紀州綱教卿こそ下

英法とのへだてもうすく交るる云
[illegible]
せうと張こ乱逆を発さしむ大谷能なも知
松平英法等吉保計策こうの
清凡此月を挿ひ明月活凡を挿ひ大谷初の中に初と快け合の人も松
初のこうしもこと人の西せかるを変ひ初てそうを遂成就もうの交うものやうの祝こ英法う
吉保う賊の万代賊為蕃ケ懐抱を宮れ元年十二月十百三五の祝ある男あを
お綾を綱吉公の御養をもて綱吉公代と号ひ英法う養う棟威
と宣ひ宮臣を綱吉を成の栄曜仰の嗚うこ
酸情られ一ぬ年の間よ綱吉公を心の依こ非りまうこそ
らせをうの成わの先の書依成能せうう内ハ綱吉公を白山の屋へ大ぬりて来云及
のほこハかと活を進めをり何事のお起依んよこ承引こ月りを事ひこせらう
称よ若さ也を同こに程この際云をもよ家宣と不幸英通の出天打軍家
やかしれ父子の仲をお和こかしてお綱吉の機へ入まり善度と便
をうて程お存こ都宮々を押籠をうん為家宣々英依こ及らせをひおへ綾吉う

江戸へ対よと宮為一味の大名衆中を接待こおさんとそ綱吉
英法う策て思ふ一うハ都宮々へ敵対せハ自害こうを引綱教人成と依人の
思うん要笠恐れハ綱吉公と家宣々とう仲こハ仁義恭心をもて立させ外大将成ハ中文忠に対うて合戦をかけんを
してそう為ようれハ速こ出門籠守て出陣
四そ出生の綱吉代若こ天下と譲らせをり英法う活うて成て天下の権和と称
へきとの方便こ先そハ天下悉く皆英法う心化せに成て活くハ綱吉公都
宮々綱吉代若をと教告し年来の大恩を忘れんとの巧こ乱る企の用意なれハ甲斐武田の天下と
成んとの巧こ乱る企の用意なれハ甲斐武田の天下と
代所こ新宮を建んと願を示某沢新八改名祥岡と云る強うの若者と古花英教公の
二十三万石こ於て大名数の天下一と云こ云こだ
て教えの方文を施させて容こ甲府へ送りて
猶筒井用うるの心を云こ依出をて山谷の民間の統統と為て一味の大名のまの
西こへ左策むせそれ武具馬具を調て甲斐(柏原の事を松本甲州(の通路依まる故
依後の某恐こハ萩原迎ふる心と合せて年こ某を罪こ亜依こて兵糧のお事こ依ハ

馬の首毛を切りぬ法度の御しるし旅役馬に紛らわしきが為東海の若国の大将の御印の矢羽根を取り近江の勢田の橋をも勘当ありて無断にて焼き払うの掟御陣法の書をも焼き捨てられし事也ホハ西国の軍勢を防ぐ為の備え

日光邪鄭枕巻之下

井伊掃部頭謀略之事

家康近江平加藤の所辺まで当陣とて善法軍術に有と委(ゆだ)ね三略六韜に十二の秘法陣剣八十一変奇遁五十八変千変万化の奇法を委(くわ)しく通達し一軍略に於ては其比の大将誰有て井伊掃部頭直孝(なおたか)に仕(つかえ)ようと望(のぞ)み家康も直孝に我朝の神兵の成吉思汗(ジンギスカン)の如く軍術を尽くし給うと思召(おぼしめし)て細に伝て渡し給えり直孝も其後軍法を以て家康の御為に忠義を尽し給えり

扨(さて)一軍に及ぶ時は軍の謀略を以て勝を取るを専(もっぱら)とする故古保(こほ)敵逆と企つるに依て軍法破壊の法人と号(なづ)けられ兵家の司馬(しば)穰苴(じょうしょ)孫武(そんぶ)呉起(ごき)の名を指(さし)置(おか)れ古保の方へ入也(いるなり)彼の心底を探る者を探子と云(いう)

其(その)探子を召(めし)抱(かかえ)る者初(はじめ)は其通(そのとおり)をいうて帰し夫(それ)より後(のち)に使(つかい)を以て呼寄(よびよせ)せ又は途中にて待受(まちうけ)て呼(よび)入(いれ)る方(かた)多(おおし)

一軍に及ぶ時は軍の謀略を以て勝を取るを専とする故古保敵逆と企つるに依て軍法破壊の法人と号けられ兵家の司馬穰苴孫武呉起の名を指置れ古保の方へ入也彼の心底を探る者を探子と云うて探子を召抱る者初は其通をいうて帰し夫より後に使を以て呼寄せ又は途中にて待受て呼入れ

一軍に及ぶ時は軍の謀略を以て勝を取るを専とする故古保敵逆と企つるに依て軍法破壊の法人と号けられ兵家の司馬穰苴孫武呉起の名を指置れ古保の方へ入也彼の心底を探る者を探子と云うて探子を召抱る者初は其通をいうて帰し夫より後に使を以て呼寄せ又は途中にて待受て呼入れ

一軍に及ぶ時は軍の謀略を以て勝を取るを専とする故古保敵逆と企つるに依て軍法破壊の法人と号けられ兵家の司馬穰苴孫武呉起の名を指置れ古保の方へ入也彼の心底を探る者を探子と云うて探子を召抱る者初は其通をいうて帰し夫より後に使を以て呼寄せ又は途中にて待受て呼入れ

一軍に及ぶ時は軍の謀略を以て勝を取るを専とする故古保敵逆と企つるに依て軍法破壊の法人と号けられ兵家の司馬穰苴孫武呉起の名を指置れ古保の方へ入也彼の心底を探る者を探子と云うて探子を召抱る者初は其通をいうて帰し夫より後に使を以て呼寄せ又は途中にて待受て呼入れ

一軍に及ぶ時は軍の謀略を以て勝を取るを専とする故古保敵逆と企つるに依て軍法破壊の法人と号けられ兵家の司馬穰苴孫武呉起の名を指置れ古保の方へ入也彼の心底を探る者を探子と云うて探子を召抱る者初は其通をいうて帰し夫より後に使を以て呼寄せ又は途中にて待受て呼入れ

一軍に及ぶ時は軍の謀略を以て勝を取るを専とする故古保敵逆と企つるに依て軍法破壊の法人と号けられ兵家の司馬穰苴孫武呉起の名を指置れ古保の方へ入也彼の心底を探る者を探子と云うて探子を召抱る者初は其通をいうて帰し夫より後に使を以て呼寄せ又は途中にて待受て呼入れ

一軍に及ぶ時は軍の謀略を以て勝を取るを専とする故古保敵逆と企つるに依て軍法破壊の法人と号けられ兵家の司馬穰苴孫武呉起の名を指置れ古保の方へ入也彼の心底を探る者を探子と云うて探子を召抱る者初は其通をいうて帰し夫より後に使を以て呼寄せ又は途中にて待受て呼入れ

一軍に及ぶ時は軍の謀略を以て勝を取るを専とする故古保敵逆と企つるに依て軍法破壊の法人と号けられ兵家の司馬穰苴孫武呉起の名を指置れ古保の方へ入也彼の心底を探る者を探子と云うて探子を召抱る者初は其通をいうて帰し夫より後に使を以て呼寄せ又は途中にて待受て呼入れ

一軍に及ぶ時は軍の謀略を以て勝を取るを専とする故古保敵逆と企つるに依て軍法破壊の法人と号けられ兵家の司馬穰苴孫武呉起の名を指置れ古保の方へ入也彼の心底を探る者を探子と云うて探子を召抱る者初は其通をいうて帰し夫より後に使を以て呼寄せ又は途中にて待受て呼入れ

一軍に及ぶ時は軍の謀略を以て勝を取るを専とする故古保敵逆と企つるに依て軍法破壊の法人と号けられ兵家の司馬穰苴孫武呉起の名を指置れ古保の方へ入也彼の心底を探る者を探子と云うて探子を召抱る者初は其通をいうて帰し夫より後に使を以て呼寄せ又は途中にて待受て呼入れ

一軍に及ぶ時は軍の謀略を以て勝を取るを専とする故古保敵逆と企つるに依て軍法破壊の法人と号けられ兵家の司馬穰苴孫武呉起の名を指置れ古保の方へ入也彼の心底を探る者を探子と云うて探子を召抱る者初は其通をいうて帰し夫より後に使を以て呼寄せ又は途中にて待受て呼入れ

一軍に及ぶ時は軍の謀略を以て勝を取るを専とする故古保敵逆と企つるに依て軍法破壊の法人と号けられ兵家の司馬穰苴孫武呉起の名を指置れ古保の方へ入也彼の心底を探る者を探子と云うて探子を召抱る者初は其通をいうて帰し夫より後に使を以て呼寄せ又は途中にて待受て呼入れ

一軍に及ぶ時は軍の謀略を以て勝を取るを専とする故古保敵逆と企つるに依て軍法破壊の法人と号けられ兵家の司馬穰苴孫武呉起の名を指置れ古保の方へ入也彼の心底を探る者を探子と云うて探子を召抱る者初は其通をいうて帰し夫より後に使を以て呼寄せ又は途中にて待受て呼入れ

難しと尋ぬるハ其器にして所用今に難儀仕られの此人を召出されハ百石にても申さう
様を宛行ハれ是程の俸分に能て行ふ事にはあるべき天下の御家の兵名し
てませバとて猶云捨ても出来なる時それハ力なれ此事の上ハ心底の程を見せんとて上り
よハ戦場に臨てハ君命に背かん諸将ハ出て敵に向ひて戦を决し主従の中も疑心
有てハ大事を為す事有へからん勢なりぬ主君と見れて死力を尽さんすべし勝
負の番に帰りて死するなりし将軍の若君のと云猶を搆へ策を欺さうかハ当分
心ならしとハ申されまし一言もせよ恩もせよ角折まれまりとハ心力を尽して央
量を成就仕り猶と桃を剃帰府を待さて此猶に成り候仕候まで存語て及至独
者に此心底を打割て仰變られぬ本懐母公の名を見ん極メまて扨て此服を申
読ふと為るを聞てそ申ける右保せて今扨ハ従ふ中代君に天下を譲らせまゐらんと
云ハ弟の計略成しと云すと何者そ尋来りし原ての後こそ又へくる是にハ流く極字
かうるは心を静て一通りせるへしと遂成そふよ云られハいやサ人の中ゝすとせよし云ゝ後信
拒成君にハ只只ア此初雑なる君君を猶に実大公を企るハ雪を以て人形を
作り糖を以て向ふに同し実寺因まらさる小児を猶物に君のひ若かせまても君に

思し召さたる一大事を企化すと聞て此儀を先ひろめん為に上さセんと云られハ若殿
此外にて不審の段相違せり今ハ何をか隠さん来年来て天下を押領せんとのヒ子の暮
し防衛を蔵る程の妙に幸成の将軍信酒に勝きをひて一天下の政治を執行ふ者を
成就させ防衛なるは未だ只一味徒党の大名旗本并に武勇の浪人を招き集
めうるも某か陰謀を企つると云は只に君て主君を弑しまいらて天下を奪ひ取逆人
と謀らふかし従りんやと忠義を通しき幸に若君に天下を持たせまゐらんそ為に謀叛
を起させしと云て能ふと聞え佛方に従ふ筆笑ふらんと其文を巡して徒党を催し
より大炊頭家の宗兵屋列紀列は義のこ家は井保酒井等を始め譜代の大名
衆に一身せさる輩と前尾能寺かハせて本懐を遂る者なハ一つとして知れ君党人を
考へしと偽寄するも故大名は旗本多く従ひ属す所は是をも奴門に合戦催し
ても軍用兵粮用意金武具なかり何ひとして手早くハ果ずて加し是某か計略
なりなさるを主として正當擬せハ将軍若君に害しまいらて任せ生涯を以廃する
を待らんと忌み間もなく其方に不審せられて疑きぬる私手万迷惑なり寸に疑念を晴
まよらハ将軍忠を立てけさかりへしとお声たかく成て云られハ其後綱渡ふ君都付まで
話ハ泥に爛り蛻丈御る蛻成け蛻成の形安そ静の為を見んやと揚子か云云

菜の如く君の寵するを知らん誠の形に因て表を云長吉の猿の何分にも
ゆるしなきに近しむとなれハ高妙なる猿の計略能く道ハ人目威しの猿も武君と云
主の内形くしてハ知らぬ段ある天晴神変の出語深らかに蚤背しつて吉保ら心の座
を失ふ酒井侍事異つて内通せり

不礼誅　林大学頭讒侯とす

驕の山ハ深くして貴の海ハ猶深し扨も此城内の外へも誉の勇に成し給ひし
折くの光源玉まして此奇を以て成しぬれハ此程陵の此度にして兮礼誅と号して
其他女を数多集め其濡事を始め一味徒党の大名の面々に諸く誇を賑て出蹴
ろさ護持院僧正も衰を賑て有頂天に高し酒宴に入て踊しハ是や天狗の所為
ニと浅ましく思ひけるか有徳之花の裏月夕の茶酒机案肴に余念て雪を羞る白拍
の来こ行れる踊るかしんや和歌を詠し詩を賦して思ひを述る佐ひ人酒色の仁ふ
よ振を来ハぬにして其形の如く素の肌を衒ひき眺縮緬の中衣紫帛子の襟
に紅を合まセ昔上戸の中にもなく云たり武藤絃と云ふ大臣ハ出生来りと作定
に合ての礼酒弁史学しうるうる尚時の大儒好文利林大学頭作篤を召され
何成も形ら知る書を讒護伝へまつる古今より最も寄りて源氏物語を講釈し
うれハ僧正実と云て先ハ物語き読めらぬ君僧ら而曰の書物箱見に有と懐中より
取出して花台の上に並んを見れハ先ハいうよ此所江戸中の下俵家へ参りてら口号
にせし源氏病何方へ行きつるさんつまの山へさつま山ヘと宿へ入れハおかすいかや
節鳴と以て百丁程を手日に暖完に廟ふ孔の弟紙之張る而の作篤尚感せしまし
かも驚らね程まで寂を取出し御座に向ひて一調子声高く
大日本西海道九箇国之内薩摩之国頴娃郡薩摩富士者開聞ケ嶽共
云亦者筑紫之富士共云藤原俊方朝臣之哥ニ薩摩方頴娃郡之洞窟是弐
筑紫之富士登云四羅無ト詠シ玉ヘリ其山之象險河森々トメ巖峨々タリ山亦
山何之エカ圭月巖之形ヲ削作セル遥ニ谷底ヲ臨観レ者水亦水誰カ家ニカ碧潭
之色ヲ染出セン哉ト読ましられハ護持院安て猶もうこしく今か形らけて衣ら
丈ぺ読み入とぞまうるれハ信篤畏て曰於万女生布ヲ水面ニ瀑シ自ラ落涙ヲ催
セリト講ずれハ将軍も尚先の夷に入せたひ形る余拵の短冊にまうられハ流石ハ
天下九大儒好文軒とて有らるとて此感慨の余りまた胸後を下したまひける鳴呼十
目の視る所十人の指さす所恥まじかりける合や謗る人も多かりき

護持院酒井雅楽頭ヲ偽寄ス

夫後木の信ハ約を堅くせんか為之献芹の賄ハ心を奪ハんか為の計略之欲張盛
の英傑の諸侯荷擔の為ニ人を拒け交りを專ら結ひける其党先人の名孫
非を去る是の後ニ非を忠節と称れし淺慮世を欺きて蒙ひ知る人なし先ニ徳自
からけ妬人か所為ニ移りし軍ハ私欲佞曲邪賄ニ為て己人分の威を窮め大恩を忘
却し天命ニ背きて既ニ八世の恥をめを蒙るへし去程ニ英傑の諸侯ハ是を去ニ乗かゝりハ
依儀敦を企んと徒党の大名前代の一條連判とて厳重なりき中ニ一番ニ茨城和泉
守安藝細川越中守保利保科肥後守[illegible]容松平伊豫守池田備後守更級作守
昌章松平右京大夫輝貞牧野備後守成貞稲垣対馬守重富黒田豊前守直邦太田
出羽守資晴内藤丹波守政森大久保加賀守忠朝秋元但馬守喬知土屋相模守正
直右十四人の諸侯の一致ニ大名分合て五十七人大小名の籏本合て百五十六人己ニ八
軍勢に何の不足か有んと總て何分かも御所方ハ井伊掃部頭也其人何とぞ彼か
大老職を退役させて権威を落脚させ江州彦根の居城へ閉居させて西国筋へ追下させ
んハ何分の方便かあらんと吉保護持院心を合せ綱吉公へ申上しと讒言を捧へて遂ニ其
了役より掃部頭を御前にて仰出されけるハ其元義老年ニ及し役に永々の
大役苦労之事の程を推察に依て先近の知行ニ千石の加増を加増して餘合

五十万石と定めらるへし中国九州の中ニ於て所望ニ任せ申さるへし猶又上ハ先近の
居城江州彦根の義ハ西国と東国との境目要害第一の所成ハ向後ハ当城ニ中納言人
を策ア置選居さるへし猶又へしと厳命有れハ掃部頭謹て承り上意ニ猶有難
承知仕りぬ去なから当家先祖掃部頭直政公関ヶ原の一戦の剋長男兵部直親か為ニ
神君御本陣を御部られさせたひ既ニ危く御命をせかれし折に井伊家の先祖万代
十七歳の初陣ニ強敵を退散仕らせ以来忠功莫大成しとて其敵石田治部少輔之居
城己仕の後彼か居城江州佐和山の城を井伊兵部直孝父子ニ下し置れ御松平の
子孫天下を持たん限り井伊か子孫あらん限りハ居城仕へきと有り墨印下し置れ
慶長五年以来彦根山の城を守り七代ニ居城仕候処ニ今度此厳命ニ依て当城
を指上候ては先祖大権現公の御墨印ニ反古ニ成申さん既歎ヶ敷奉存候其上自己
地三十五万石ハ差上候て居城退散と有ハ以ての外なると忠入て立上り綱吉公も
免こハこまりせ給ひて猶ハ千代ニ居城すへしと手持不叶法ニ而候ヘハ天政的愚慮
申す案しけるハ先代々天下の執権職ハ井伊と酒井の両家之持ち当時ハ井伊家と
此職を譲て権柄を奪ふなれハ酒井雅楽頭か家ニハ本意なし去て若しも泯ん彼ハ是
去一戦を起さん砌酒井をもって井伊を押へさせんハ宛然一の衆なりん両虎二龍之闘

ノ去夢ひ候に生るやうにて史庸頻侍ふんへしくく酒井を待ち入井侍を討さ
むへし急報桐野に驚る刻ハ機漏多を指いて幸ひ汐と古人の云へる藝のこと
ひ断をいて仍分計略を巡らし酒井を味方に加へんと思へども急返事ある方へ分配おと
せん一向機入まなの急報よまと云ふんハ侍もれしハ受ハめ物をへくく審候もれし後
将院侍ふハ如何なる処置の方へハ去ル天下安全成運長久の初務と礼の思て月臨
院ら方返報ありしとハ侍をいて来酒井ら使へ之被将軍の北為こうしに御
しハらんハ最心易らんと夫な侍ふハ酒井忠拳の使へ打被ふ討ふ方
山の西被侍て後援将院を方の人ふをさけ云けるハ今度将軍侯ふの為
更ら方吉保ふしふて大小名の為く某旅平の為く大勢被され
たり尚酒井家ふ云ハ侯氏の中の大家と云ふ史代く忠臣の勤かれハ公方ふも
別をて称ふやしハ右の方一味連判の列に入方ハ更ら方家大抵ふねしくやふ
声に成て云出ふれハ被ふ思ひめて先ハ改りぬる方命うかと上の北用と肯ふハ仮
令ハ伯家子細ありて遠背ふ忠拳に方ハ大小名一味の連
判をめる新参兵ハらを共ふハを別をて近年あれせる成ふらの更ら方ふ
しふハ右遠命しハ一統ふて懐休ふ一軸を取出ふてそれをたる忠拳一点を
それよて被ふ討ふんとせしふ君先ハ余りふ探ふ催ふ我ハ参に調ある者のまま成へふれハ夜分深更ふ
智の間来方ふ私り垂判形を被ふ討ふ君ふて方ハ侍
ふのて上の北命令と主ふ上ハ北遠背ふ北四座を取初被ふて被ふ仕ハ
を上聞ふをしふハ侍ふ被ふ討ふ方へしと断ふ北
件の連判の一軸を持来かふれハ徳ふ川ふ被ふ討ふ
ふ被ふ討ふハ右の一点を先ふ取ふ北ふ
不審の方ふハ一向侍の北ふも及ばれハ
徳方ふハ桐畑等家ふ座ふ被ふ討ふ君ふ成ふ
世ふ貴候なれハ富貴ふ安ふ成ふ北ふ
侍ふ世ふ富貴ふ安ふ成ハ必ふ更ふ悪ふ悩礼ふ因て病ふ
侍ふ世ふ富貴ふ安ふ成ハ必ふ更ふ悪ふ悩礼ふ因て病ふ

の中に掘り和漢の秘密を稽へても祝賀へても祝賀の心厚くして行の益ある人柄なり将軍家も
ゆえ裏の心厚くして益ある人柄なり将軍家も十一月下旬の比より病を発し
昌しまり言も発せず食事を供せしが自汗盗汗玉を貫くごとく日を追て衰弱
滅しませり依て典薬助半井通仙院法印驢庵今大路法印道三法眼
仙等流法を加へ種々に加持祈禱あれども九月栗本山田平田半井久志本曲直
瀬等の典薬の者ども日夜医薬を進らし術法甲乙を尽して方剤秘術を尽せど
いよいよ元来陰虚火動の病痰うち数法(ジュ)法降火湯に六味丸を兼服(ブク)成れども
或は清離滋坎(ジカン)の剤を施しまれども指てのしるしもなく
歳春日多賀日光等の社へ悪疫退散の代参を
平癒の祈禱三宝通の七仏薬師の法を山府君の延寿の法をおこなわれ遍羅
尊の除疫の法仁王経般若経を修行せられ神祇の掌ども中院検六根清浄除疫
の祓を勤むる陰陽道に六甲秘呪の法を行ひて邪魅衆難を避る密呪を唱る別
して護持院僧正は営中九元の傍に壇を構へ五大尊の
法を修し護摩のけぶりうず巻と立ち天魔外道も
みうごかず悪事ども皆悉く(ことごとく)滅尽(メツジン)せしめ給ふ
保吉公御病に添ひ奉りし人々は日夜寝食も忘れ
のみ代に至るまで比類なき孝子なりと
あて客殿を宅的僧正に譲り一院
寺方へ家宝名物を招請し招福のよろこびを
門に似合ぬ為工夫を尽し最上の吉分別と
御後に諸侍衆毎日の参上先有成ず
家宝名品ども心の数奇好み招待
僧正のまなれば主従共に
成をこと仕置等厳重
同宇兵衛と名を改め主君を勧奉らしめ
すべの者ども父母の如く思ひ
永城前の殉死
ハせて御後指継ぎ跡目
られ家宝名物悉く進ありて
ひめまつりて世に
保吉公御病に添ひ奉りし人々は日夜寝食も忘れ
のみ代に至るまで比類なき孝子なりと
あて客殿を宅的僧正に譲り一院
寺方へ家宝名物を招請し招福のよろこびを
門に似合ぬ為工夫を尽し最上の吉分別と
御後に諸侍衆毎日の参上先有成ず
家宝名品ども心の数奇好み招待
僧正のまなれば主従共に
成をこと仕置等厳重
同宇兵衛と名を改め主君を勧奉らしめ
すべの者ども父母の如く思ひ
永城前の殉死
ハせて御後指継ぎ跡目
られ家宝名物悉く進ありて
ひめまつりて世に

備前の家臣に向御抑ありしも我君に毒害し御命を絶んとの條件なる土を知し
候ふ故ハ幸ひとやらさん又御系図の上の御来歴ありハ不敬成とや申へし何分
ありし御殿様有志て於ゐたしと大音揚て罵りハ御相伴の諸侯方を始め次に代備
の人々目と目を見合せハ狼藉成と刻し止むる時に儀持ちを出役何有成ハ此備
前守殿も根津宇左衛門へ毒害し事有らハ定めて於茶湯授有ての事分からん
御前の若の徒ハ向備一定の諸侯方の御前にも有ハ其御分んと嘆ら(ゐ)れハ家定
公ハ静々と御座を立せ給ひ此者ハ茶の脇迫に根津宇左衛門と云ふ者此月々乱心
致せしゆへ出勤をもさせす何とも存て居たり此所へ参り居ひょうしんの悪口雑言御許主
備前の若宮さまんを毒も孔毒か有保あり孔事成者のすかれハ何事も用捨有て呉
らんとしと思ふしと縁も御へ出させ給ひ御中にも茶津坊に参らせ給へ召し御刀を差せ
合ひ宇左衛門へ出せて御前に年伏処を接待に差出へハ根津の首ハ前
へ其席に有る角て家定公何ハ茶の心底ハくの如のかれハ乱心に掛て有るまし
扱今日ハ切角の招請かれ共茶ひゃうれも翌年若殿よ其席の是を呉し姫君ハ宗室
て入来給ひへしと御座を立せ給ひかれハ何と若へを申さもれし其時同様御常
備前守家定公を援しもり出し於やよ御伏志て御取鉢をとりて歳しに引る棒此

根津宇左衛門か父ハ家定公の父君保重公を深く恋募ありし時に合し後忠義心
の誠伝成を感し又根津権現と崇め祭らせ給ふ故又此ハ御分出て御分も守らく
肴さまハ疑なおそ難も深しと父に猶も忠臣今此程の宇左衛門も主君の為ま
他り年来にも成て逝去て御手結に合ひ又父子謀共に一命を抛て莫大の忠義をかし
たる義士成と家定の代に至りて後々の宇左衛門も同じ宮に御勧請をまう定れ
社にまつりと唱へさせ給ひ結構に御造営有て年頭の御祭礼も厳重なり

家定公の其後は御発病の事
不吉とかして服薬をけり若ハ人害せんとに尤天心を深くし乱と植て乱とは至と
植て宮と的天個頻こして深そらかれとも総ても漏もとこなる古今の詞を兵へ奴こ
そ不便なる色扱も護持院僧正の深く主て云ふ家定公を毒害しまつらんとせし御根
津宇左衛門か忠義に依て御食膳の席を掛けし故叩時に御取鉢をまもし少々綴せし
天命の遠せしかハ今度ハ又御発病有りへ其廿二日に御発病あり居しと再に取ひける
まよつしと是非なくも家定の御様子をまし給ふれ共に何分わかも御心元なく思されて牧田
に近と御使者として井伊掃部頭へ御尊慮をまし給ふれハ事其此処を取り奉るの旨ハ
ある御年をまさ御見舞有く御る遣ハしと御老中をとよらかれハ不審ありし哉

家宣公御契約の如く廿二日の昼時分御饗応の亭へ御入来ましませハ兼ねて一味の
大小名并打揃ひて御迎ひに出給ひし者あり折ふし井伊掃部頭直興ハ兼て御饗応の
方へ入込せ置し吉宗の内通役叛逆の子細ハ委細承りたる上なれハ家宣公ニ
を害し奉らんとの企なるよし篤と打留めて吉保か屋敷ニ来り井伊掃部頭推参する依
子被露有れハ案内して奥の大書院に通り大納言殿の御前ニ出て云ふるハ吉保の御
招請に依て今日大宰へ御光駕ニ依り然て上様ニは御和の如く先月御沙汰の
所も上様ニハ御遠例ニ依て上下共に左のミ当家へ立寄り御相伴ニ御出被遊
く御光駕ましませハ此の取扱之儀し御叛逆之内のこの心に掛らせなし
御心底に万や如何あるハ存ます御尤へさりて天下万民の為の秘事あるハ御大切
遊て御目へしまして具ニ御代仕り候へ共最御立去ましてなる(?)若し老臣等の流儀
を天下の大乱の基なれハ後ち有て一云伝出ても今庶民之静まりならす吉保も
御持下御沽に操りとして御当て上様御式一ある事ハ御嫌疑被れさせなる叛
御悦ひて之第栄の御栄家に御光隊を都ひやより追討御勝被成まするへき吉宗ニも
後尾に暫御逃を成りまし様に御乗威を執る事と云て相伴し上様御遠例ゆへ今夜の
後悪事にて御光駕まして彼れ居しと家宣公の御身をかけ理不尽に立たる

此奉而て之ハ雖城を免之候に謂る虎の尾を蹈毒蛇の口を遁るゝとハ斯る事とや云ふらん
井伊掃部頭直興大老職退役ニ付
右ハ能を以て賞を得られ衆ハ智を以て自宮の宝に先り多く人の為に賞せられ
而て亦人の為に苦しめらる人ハ才により危に臨て一生を銃と申ましけると
以て先ニ家ニ生して長職をもけまさるハ先祖の不幸成しと云ふ天下の権柄井
伊掃部頭直興ハ吉宗吉保か叛逆と心付し初より廷役の深に御察し
一致を企るの棄て居りし主し家士ら兄無に至る寝切させ吉保をはし一致に討て之さんと
而し合て垂秘まて居りより保吉公の御病苦に悩ませのよ裏英達る文珍の思を
発して大納言殿を害し奉り保吉公の御病流とハ云ふと素性をしらず保身天下
を譲らせ奉り吉保後見を成て天下の権柄を執して已か境に成業を以て之を亡さんと
の深き工夫ほと無に閑通を共し且深慮を追らし承られ承に罪のことし
家宣公を吉保か屋敷にて害し奉らんとせし先掃部頭の謀に依て文武度も仕候
せしと五十一倍の軍兵を合せて急やせんと用やて密談せしか間に御年頃も終りつ
宝永六年の春を迎え保吉公も遠例成さ付て諸侯の前に年始の御礼も
大老職の役柄掃部頭直興御役代として夫々事を取行ひ権威をも振ふ事被る秘権

職をハ先ツ追役させんと紹古公へ種々ニ申合有り剃ニ来ル六月十六日ハ御家例の御具足の
焼祭を用ひさせらるる吉例なれハ大内公家室へも御出有へハ御成を申まさし御祝義ニ
て御家殺害し奉り其上ニ其日紹古代君へ天下御掌握の披露せんと工の儀ニ企ること
不敬なれ是ニ依て六月九日の夏陣ニ紹古公より御使者ニ聞ク所存を以て井伊掃部頭
主兵ハ急御用の旨ニ而只今御登城有へき旨仰付られけれハ即刻登城有て御前
間ニ至り出られハ将軍御寝所ニ而言有て曰く主兵今夜来る病悩例ニ増り存命
不定と覚悟せり依て天下の嗣ハ既ニ譲り置へき旨臣台聞なれハ掃部頭謹て承り今度ハ
御大切の御遠例と見え奉りて御身ハ典薬の輩ハ医術を尽し諸寺諸山の僧徒ハ御
病悩平安の御祈祷ニ丹誠凝らし奉り上ハ追付御快全ハ有まさんと存奉る天下の
御嗣君を定め御代を譲らせ給はんとハ恐ながら御有御厳命なれ共先年甲
府家室どの御養君ニ定め置れ西の丸へ御入有まし上ニ於てハ御嗣君の御儀ニ付てハ
御案を痛ましめ給ふ御事も在らす況んや大納言殿へ天下を御譲有まして後ハ
んと存奉る紹古公ハ何の御縁ある事を申すまさね今般護持院僧正御祈所の儀なと
声ニ成て叱ても申上ル至し無りと仰出されて我も有しと本さりて其あをはるニ御将軍ハ
御例気ニ快ゲに託されさせ給ひいとふ主兵家室をと存念ニ甘しハ紹古代君を御謎せさる要

の支実子も出生せし上ハ従られと云へき様ハなし天下ハ実子の紹古代ニ譲り家宣ハ
元の甲府の城主とも成し置し万一遠背ニ及ふ輩ハ急度曲事の御沙汰に及ふべきなり
次よ主兵ハ先様の身として永々の大役守て苦労ニも存せらる在し殊更実子
を指置きて養子ニ天下を相続させんとハ恐ながら其理も無し役なくん我も上ハ今日
只今御追役有て居城ニ帰り候しと是を案ずれて我も在らんと宣へハ発しとせた
主兵ハ頭を下て居られしか通る返済ニ有保左京大夫輝貞に居合掃部頭殿ニハ永々
御大役を御勤有りし首尾能く御追役の上ニ而隠居仰付らるる段先君の思召御
上ハ最も御立有て我も有へしと云られハ主兵ハ何の答も無く所しらさる体退道是
皆倭人なら申述むる故なからんとハ只々先達ハ将軍の御厳命在る上を聞届ニ而して
をとゝしとゝ在を立て退出をこそせられけり

掃部頭主兵御寝所ニ而御厳ニ来られます

君ハ私の礎ゆゑ在らさるハ忠義とのみ古人の戒を聞し謹れる掃部頭其子細の
旨役よ支分主ニ御寝所の御役ニ参上し奏者役ニ及勤解也をいて伊豆の高の
執権を申上ら進らるハ我ハ今日御前ニ於て退役の上ニ隠居を仰付させられて
只今退出仕候付御服元の為ニ参上仕なし丈ニ付寄ニ云よ仕度子細の申上候をね

民安穏の祝ひを成しまゐらん様ハ是叢諸御覧を御嫌立在まして有より莫大の御喜
根広大今迄の御功徳ハこそ見へ申し猶ハ御当家の天下を治め絶成さるめでたくんも文叢華
にお顕かしなりんと此上ハ御前の御賞翫ハ弥にそもらん要なる合子細も御庭頃
女中迄の口耳も伝り荒増斗と云上しまゐると恐入てそ申さるゝ御座所にハ古作の
御叢とも云なりん料紙硯とりなほして一首の古歌を書せらる
歌ハこそ最も様ハめでたくれ治隠れ行舟をしそ思ふと御保年在まして揮毫近へ
下し置ハ西兵僕て押戴き暫吟して又頂戴し是ハ誠有仕合なる此賀なるて伝ふ
せ給りて天下ハ泰平に治り万民安穏仕り数年の御武運長久何疑の御座なしと悦び勇みて
退出なる
謹みて曰上の句の本歌ハ伊勢物語の哥也是ハ花を余り愛しけるを憂ひて読る也
。歌ハこそ最も様ハ月も有なれ浮世に何か久しかるらき　月も愛なれぬハ花しとなれと云
心之歌とこそ花の上にハ賞玩もなれ浮世ハ盛者(シャウ)必衰(スイ)の理りなるを見るハ様に有と云心也又古
今集に○残なく散るそ目出度桜花在りて世の中終(ハテ)の憂(ウ)けれハ是も同心の哥也下の句の
本哥ハ世の人能知りたる柿本人麿の哥也○朗(ホノ)見と明石の浦の朝霧に島隠れ行
舟をしそ思ふ上の句の心ハ保昌公を桜に喩(タト)へ御遠慮公を散ると云然下の句ハ島隠れ行せ

給ふと残念におしぬれとも下万民の為に君の御命ハ惜まれと御代の治るハ目出度ことの
御心也古哥の上下の句の入違へる哥ハ女性の御身と為て速そひ給ふ御事を察し
詠ひぬる逆様成御事之一首の古歌に而只今奉量の御心を合せたまひて即座に掟ハし
出賞なる御物ぞ有難も余き此御月輪の御哥今に井伊の家に伝りて什宝と成
て有と聞へ侍る。

御臺所保昌公を御介抱ます

凡の形ハ動(ウゴツ)に形なれ水の象(カタチ)ハ濡(ウル)ぬを露(アラ)ツ在捉人の心も一方ゟの所に留りて
若急賢く是ハ尤りて物へ角て翌日十日の朝御臺所ハ保昌公の御病床に入せ給ひて夜
前の御容躰ハいかゞ渡らせ給ふと御すゝやと御近習の者に尋させ給ひて後御退出ありけれハ
今宵の御悩(ナヤ)ミハ常に変らせ給ふか御看病と案し入る所一方ならぬ御心も尽させ給ふハ我々も
恃残多く思ひ給ふんなれハ上ハ御傍に宿直(トノ)をせん常番の花井玄庵長谷川医師中井
今大路ハ次に控へて御前の者共ハ休息有らし用事有ハ召出さんとの御事に慎みて諸
場所へ退きより控まるも御臺所ハ将軍の御側に添せ給ひいくよ御心若痛く御ふ
せなるや深き御労(ヰタ)りにて在まセ給ふ嫉妬(シツ)嫉(ゼジ)と言れなちん自とて心細り此典薬に
尋させ給ふハ今度の御遠例ハ常(ヨノツネ)ならぬ御病気にて御薬をさしあけれも更に御験(ゲン)宰

のはあもはへさせかたれ手に一切も此本後は在まさしと申せしものを望ひ行りし分悲しさは
やるかなかし神に祈り佛に禱ひし甲斐もなかし次第に弱らせかふ此有様は是非に如はぬ事もたえ
老かな不定の世の習ひ松の齢ひに准へて千代もと思せし露娘若さへ先立給へる事なれは
況や六十年に余らせかふ此事にて行へは今度は此限りと思し百し明らめさるかなし
但果ぬ此世は假の宿り成と今生にては天下を掌握在ませし紫殿にて茂更遊黄
泉の此旅路には誰にて供奉仕る者もはまし唯彼佛の此聖教を頼み無数思召れ権現云
より此和尚の口称専念の此経営をこそ起こしくも此意を懇させかふ在しと涙と共に
擡口説かせかひぬれは綱吉云は此墓所の此舟拖を拵しけるは此親はせまて此様を拵
に睡やくしと此寝からせかひける此墓所は夕頭分此覚悟寵めて在ませしと此心能此寝
成ぬる此親をつくくと此読みなり此心の中に思ひしはめ何に天下の為なれはとて二世
と兼ける我君を連そふ妻の功へなくも害しまると云すは一教多生此菩薩の慈
悲と思召此見るさせ下さる在し妻子珍宝及王位臨命終時不随者と佛は説かせ
かへ其自とても生かるへる命にては侍らしに断て追つき来らせて死出の旅三途の川
を諸共に此身をたりて渡り来らせ此在し時利拵りて嫡省は忽礼世と成は目前之
家康公分此和尚の天下東延川せは断絶せん心弱くてはけふまうしと兼て用意の

懐剣をまるりと拵て此目を閉かせかひ此事を御孫陀佛此声諸共に綱吉云此此心元
に寝と寝迷かひけれは下地分腐苦に弱らせかふ此身なれは呼と斗を此最後にて河
へなくならせかひける伊豆の為に迷に夜の被を引寝ひなり寝そ大すの場所成と
此悲歌の色を隠しかへさらぬ孫にて在ませ先呼と宣ふ此声の此線の間に望へ忘れ
何すやらんと皆ら驚隠して此寝所の入口に来りて窺なれは将軍には此墓所の此膝を拵と
して此寝成ける孫右なり此墓所は綱吉云の此額を拵摩りかひなから拘喋教育に此
心能此寝入成らせて在ませしに此目を覚させまるなりといと忘しやうにて宣ひける
良賢者て伊豆の為を此此線へ伊出なりは今日を対なふ此機嫌能渡らせかふ此遺
言譲補の此法法伊藤さるへきすたのなる大阪云家宣公兼老中の為に勤らしに井伊
掃部頭松平西法寺松平太原大夫護持院僧正倉海等か譜代諸侯不残登城をつき
分を勤務の老中左国本侯等阿部其後等へ伊勢らるに依て此使者の為をなして上意を
とお觸らるに此墓所は夫かも上様の此所望にて此厳の為にとて琴を弾しけれは良賢
しそ拵はしける程なく諸侯の為には急此用の此百成と不速登城をて此線に拵らる
其所此墓所宣ふ様上様直に此厳命有へられと承るの此遠例の上なれは此苦労に当
迷対史此声も立兼させらるに依て自らるに申渡せよとの此百命之自公の為に何成

謹て承知致されて御請申しける処大納言殿を始御間近く召出されし上様の御事共御
称の上御奉公の御遠慮無之切に御勤り候様御念頃御心懸の旨当年は御代替りに付て今日只今より
大納言家宜しく天下の政務を御譲り在まさんとの御事一に帝位を嗣ぎ給ひし事に付天下
を泰平に治め万民を撫育まして御座候様の上意の儀扨井伊掃部頭殿を始め各にも一統御祝詞
の大役並に若年寄を兼し此度役義を免除し隠居申付せしと云尤只今家宣公に天下を
譲り奉る迄は万事分限の儀を大義ならず大老職を兼務さるゝは御尤ならんとの
上意なれ又次に松平豊後守を召出されて其方儀も身分職分も所詮近し御用人の役義をお勤
の段其方身分に当今日只今退役申付る旨隠居致し休息して仕へしとの上意之又次に護
持院僧正を召出され年老の身分なれば久々護持僧を勤め殊を掛られし段御預
之所に思召さる依て今日以後護持院の住職を返院申て本寺へ帰り心易く慈恩を
只今にて隠居申付しとの上意之又次に松平右京亮兼年寄兼役退役申付る旨
奉行荻原近江守返役の義は是非の事今申渡さる処にし大御厳命の趣仰付
申て諸侯の面々一統各々の申へ中納言御隠居の御上意也と御申されは各々
頭を下げ謹て御請を申けり

酒井雅楽頭殿取計ひ　綱吉公御薨去之事

己を利んで己を亡し我に泥て戈に破らる徒ら世にかゝわらざれ天道は争を欠き積悪の家には
て人望に背し荻原近江守保護持院隆光等々首尾を逆しより一味徒党の大谷兼
其籍被下今にて稀我身に勢らんと為水を湛へし如く末に月と月と刃合て当世の
も反相ん時に酒井雅楽頭忠挙列座の内を進み出同朋頭林原に申付大盤柳を書院の
其内に運ばせ炭火を推して焚上させて扨雅楽頭殿諸侯達に対面して申さるは大樹様の
内々の御厳命に依て荻原近江守保を御役されし子細有て対席の諸侯達一味連判を
ら致さるゝに依て護持院僧正彼連判の一軸を持参して天下の御為と思召て当ても来に引形
致させ居さる至る迄も進め有べしとは天下の御為と思召すは仮初ならぬ一大事と称し来
も同心致強く敵と悪業を逃らしめよとの事と称し皆彼一軸を取り寄せ此に挟を須や
宗邪に昌され彼党と延引及び今に於て披見致されけるが此一巻彼の外に今日前将軍
綱吉公大納言家宣公へ天下を御譲り在ましけるに就ては一味も連判も今更詮無されば
此一軸は反古同前の物にて各衆各の御眼前にて火中致の事御一覧有るへしと火炉の中
へ投入られは忽火燼と成て失にけり此有様を見て徒党大名諸侯各々積年なる心地
して何と言ふ人もなく安堵せられけり此一巻を披露ては忽大乱と成るべきを
流石は当家の柱礎の臣神妙成方なれと皆心中に尊敬せり扨此時の様を実々と左

江戸の大名達まで其の為にハ皆々相の事蔭ながら其の事にありし御家務を御領の御
規模に登城有家宣公御治世百ヶ年の御規模と思ひ玉ひしと見えて実にしれ元や角まてん日
不及嘆ニ及ぶ所なり御厚恩仰玉ふ事ハよ猫にハ大納言殿へ御代を御譲り在ましけれハ御心
の内ハ是に於て後やらんめのかに御年色悪く御病にせ玉ふ此まで典薬の法を尽し御言るに孫卿
かられ玉ハ是に不可す切にさせ玉ふ所を申上ける二依て其病の成の間に前将軍綱吉公
御他界の此を被為在玉ひけり嗚呼悲くたし然しむなし正保三年丙戌の年の正
月に御誕生有天和元年辛酉の二月ニ征夷大将軍ニ任し玉ひて三十五歳にて天下を
知し召今年宝永六年己丑の正月十日に終に御薨去在ましにけり御寿算積く
六十四歳御治世二十九年の其間ハ天下の武将たる御身にて在ませしに一朝の露と消失
せ玉ひ御名をのミ残させ玉ひて永く白日の下を辞して一堆の塚の主と成
らせ玉ひぬと思ひ孫を嘆む事ハ云に及バず下万民に至る迄皆涙を流しける

御台所御薨去之事

胡角一声霜後夢漢宮万里月前腸と詠せしハ王昭君が帝に別れまりて胡国
へ移りし悲しみ哭りしに御台所ハ夫かも綱吉公の御事職々の御病気在ましまして常に御床
にのみ伏させ玉ひて御心静に普門品を御読誦を次に念仏百返斗御唱へ在まして
御寝所へ入せ玉ひしが已に夜半の頃実に御寝息の女中等静まりし折柄綱吉公
を害しまゐらする積穀を咽喉に突立玉ひ御年五十四歳を一期として終に墓なく成
らせ玉ひける保養の為に御病て同様に月宮にて冥途の御供を為させ玉ふ将軍此
御台所今日綱吉公を害しまゐらせしハ明十日にハ家宣公を害し参りて前将軍の御
遺風と云絡らせば綱吉公の代へ天下を譲りまゐらせ玉ひ且内々吉保ハ駿府の城に百万石
の知行を宛行るべき被仰出ハ忽ち天下の争乱起りて軍馬の土蹄に掛り
江府を始として其外の黒煙にハ一切も繁昌の御城地民屋を戦花地の焼原となし
禄の声矢叫びの音諸死大名の営ハ天地を震ハし万民子を倒まに負て逃る世と成
ぬらん其時日に頂き至らひし大術の用にもたらん是ハ虎と闘て織徒を啖ハさる
も其には遠うとも劣りける事成るべし今度合戦発りなハ諸臣一統に戦ひて
五代相続たる松平の天下も忽ち亡び失せなん事止すべき事のように乏れさせ玉ふ優
婦人の御身として大丈夫にも猶まさりし御働き哉けると是に云つてに及バず笠昌
の万民迄が語り伝しを懇に知り彼の王嬙鬟ら妻の夏といへる女ハ戦場に臨
て敵を討ず孫呉にも勝れり其戦功をかいて君ハ人への事の為に武威那史人ニ討せら
る我朝にハ本名の武御件の妾の巴帝和田が一族の樊哙なんどハ勇斗に為て行也けり

御かよひ御座所ハ女性なからも武略勇才に兼備へる御方ハ従一位左大
臣鷹司北関白太閤房輔公の御姫君にて源らせ給ひ父母の御寵愛殊
かりし深窓の中に長ハれ給ひ楼鳳闕の内に長く成らせ給ひ花軒香車のか
をかさせ給ふ御事なかりしかと御年十六歳の御時より後林寺相続たる御簾中
と成せ給ひ江府に御下向ましませる御貞月貌媚容最清潔にして御容儀八姿の
中に見梅の匂ひ深き事も更なり御心性も優美にまして尋常の御振ひに書
籍歌学浅を好ませ給ひ一向に政治の御事に御思ひをかせられ時々御才を論し
させられ艶姿すのこ斃ひたる時更に御姑君桂昌院殿と御中睦まして御年の
ほか今佛の道に入らせ給ひ丹誠余二の御勤毎日法華経一部を讀誦ましまし今
度天下万民の歎とかり去れの御紀らんすと悲しませ給ひ二世をちぎらせ給ひし
綱吉公を害し御ひ其身も薨かくなしせさせ給ひし御心の中を推量奉りて哀
歎も哀にも有難りける御貞烈なり

常憲院殿綱吉公御葬礼騒動之事

死生の性欲不同成故に佛経に法を説給ふ実成る形識諦の悟一味の雨の變ひ
には楊梅桃李の花の香を含て紫藻紅葉の花麗一木にて見の機に千差万別

あり又八万四千の法の門に分入僧侶も佛の御法を守る毎に戒律禅定秘の化義に訳
り蔵ハ蔵通別圓の化法を飾りし一宗一宗の浅深を論ひ編圓様実の雌雄を
論し歴代様化の古徳すら泥武にて末世の僧寶とや名聞利養の搆揚を求
んなるに我慢の大城を築き忍辱慈悲の衣を脱て闘諍瞋恚の携を忘し八十
八使の勇兵を起して含蔵識の九藝を揚る如の僧徒なめれ佛意に叶
ひ奉らんや扨も前将軍綱吉公の御遺言に任せ御骨骸をは東叡山に納め奉
る筈に支度有し所に増上寺の役者寺社奉行に付て云上るる八権現公
御遺命に依て天下の御子孫ハ永く増上寺に葬奉るる筈の所に今度綱吉
公の御骨骸を天台宗にも御葬送有るへきの御事大神君の御遺誓
に任せ浄土宗増上寺に納め奉らんと訴へかたく何分御遺言と云時ハ前大猷
院殿家光公厳有院殿家綱公ともに葬り奉りし先例に任せ東叡山に
葬り奉る筈にて定りたる所に正月廿八日に八御葬礼の支度出来する八御柩
を上野へ遷り成し奉らんと御成門を送り出し奉る所に増上寺の大衆起死九ニ
千余人衣の袖に襷を掛け東叡山黒門前の廣小路に而追ひ是非に増上寺に納
め奉らんとて御棺を奪ひとる所に其の大名役人周章騒き是ハ権勢に剣を

れと多分の大元徒黨をして吹文に祝ゝ又備ゝ及りんと願ける故任事の為ゝ
持ち兼ね城中へ注進に井保掃部頭此由を吹かひ不速不馬にて黒川前に来り増
上寺に大元を創し證めて申さるゝは今度の御葬送寛永寺に葬りまるゝ事我々
ら斗ひ事非に亡君綱吉公の御遺命に依て之能中大猷院殿家有院殿両御所御
葬送に砌ハ何の御法も無く志て今度に限り權現公の御遺物公成と理不尽に御被
を増上寺に納めまらんとハ前後不都合の仕合之め何々神君の御遺物なれハと
て今場に及ひて亡君の御遺云も皆かれ其面目先ん今度に於ては御寄願を上使に
納まりたる斗にて御意中ハ勿論勅令に御法事御年忌毎に万部讀經御の御追
福に至る追増上寺に急度執行令申し相此後將軍家御世治万家の後の御寄
願に於ては能御遺云を云と云其御遺かく増上寺へ納めまる申し太の孫家中連判
の證文を差出候申き条大元を各々納得をして能る申し能ハ權現公の御遺物義
御遺文也將軍の御遺云も御背かぬと云者之と裁判志なへハ御々是まて更謂り
大元ハ引て増上寺に限りたる是に依て御棺ハ寛永寺へ納めまりぬ長後常憲
院殿贈正一位大政大臣と謚しかふ

大納言家宣卿御治世政道始ことす

山城國久世郡雄徳山（科手ノ荘石清水）正八幡宮御南家の元祖家康公へ御恵愛此御告
のことく御手を開く六代目の天下恙もなく家宣卿御相續をまして後ハ更滿寺吉
保ら企も空發成滿井雅丞臣の奏明に因て一味徒黨此輩義何事と云る者も知
れを天下泰平に治りぬ是分十二支の續十二代六十甲子此干支ハ云ふ及ハ此相平
此天下御治世万々罪と治る申し御巻所も綱吉公と同日まて正月十日の御薨
去なれと日數三十日を延し二月九日の日取りに御なし同上使寛永寺へ葬りま
り浄光院殿従一位貞應大夫人と謚しかふ扨又御喪父母此御喪中たりといへ
大納言家宣卿ハ大老老中若年寄寺社奉行大目付其外寄合元講代の為をを
御前に百色天下此政務を御法しかふそ御自き當又當時の大儒林大学院侍篤
同百助侍智を百出されて御ゆるハ出を治るよハ民を保ゆるハ如ハ身を脩むるにハ欲
をあふまるまハ如ハ此と云る重賞此誡有ゝ付先將軍の御仕重を改メ度ゝ事
有ゝといへ其三年此喪ハ父の居を新めさるを考と為ゝ此儀ハ如何と台問
有ハ大学院謹て申り吳玉まハ三年を以て父母の喪と仕る我朝の旅ハ五十日を
以て喪の限りと仕る是を服と号し俗諺ハ忌と称ハ十三ヶ月を以て軽服と
仕る御るとハ申せ其此父君の御政居に因て万一諸氏の若しこと成ハ義此庭ハ

能て〻ハ不達の政めをましゆて徒らなる事なり古昔の聖賢ハ非理法権天
の五つを以て天下を治めらる非ハ理を以て打理ハ法を以て撃法ハ権に以て代往ハ
天運に任れ衰を悟ハ賢人の作法なりとぞ公の政ハ天の在る之権也上ハ御
賢ゑにこそ下万人と為天下るといへる家宣公少しく了遂たるを設けるに源らすりし
との詞によせ先王ありたる詫氏の強欲を停いしをもして万民をすの事
くに慊すせかひ詫の箇男を悪む止ることを作出らるゝ詫商賣の運上生絹の
慊の御法ホを御免除有所しの大養中他の大念南を打開数ちまて生乳に付て
禁様寄合の旗ハ放へて御免ることあ永久世用の大綾通用を停止作付られ家法
の政を以せかふかれの果にて万民を苦しめしすハ今くせん将軍の御心なる
すに非を清く英傑なる浚明院と於様を付ちホの侍人たる進め奉りしすぞ之
今度悉く御免ありて依て万民恨ひ勇こ難有き御政在代々長久万こ家を
祝しける又今度天下泰平に係りしハ全く御恵深き也し御老所の御ところ成就
ありけるが其御慈附の為と思召京都摂関大閤の御末男を江府に招き逆
ひなひ巌原氏と源の姓をも改め紀州家の御血筋分に立成松平左兵衛督源頼宋と
号し御浚明院殿の御弟君之従四位の少将に任せられ上の日光を出来と

し家様を方にを宛行ひかひたる

井伊掃部頭ハ松平の侍臣是又そのことし

虎の如く此獣を怖れ抜やさむ者ひらハ九牙有故に其の九牙を脱則ハ虎却
て犬羊ともなる勝れたる人ほと大きの威勢を借て九牙となして人を威に去ハ其
威をとるに則ハ却て其怨此為に害せらるゝを知られ故に古此の度中に於て合此
評定ありしと或日井伊家の方へ英傑なる者係を指さ掃部此内ゑし致を挽せら
る其様ハ前将軍浚明公の乗地百万石は駿州府中の御城（此時駿府城ハ家康公の隠居所也）と浚明院
行ゆるなさうの御所徳に依て豊下を諸先ありし無ければ何を知らせりあ又内々の
御裁令に依て御旨あれし子細有に依て一体の大名御本等一つ連判致されし故
歳元保若公まとゞまりし上ハ安楽に相せられし故とや酒井雅楽頭の若に依
て焼捨られし故に此一件の人数ほ細に知るもよしに因て連判の者は何人投差
とれ少く後に家祖ホの連判の署名家紋本体是故あらられ万速切腹せられ
しせなれば公役表の被露により其病死と御届ありて其の子孫大学これを家の数
に家督相続せ仰付られたり定て此後少なくひかひならん後世多のすを考る仁
利の人の旧貌を察すまとや陰更機変せんと云ふ句らる眼前の親しく家老々

為に其欲の隔となりし其変り易きさま悠然として風雲のごとし生れたる上天の親
ハしかのみ明らかに教として限りなき歎きも其身の何の補ひも無き人哉彼ハ此物に替り
て親しき従業此業を身を退きて是非をわかちえりこそ一度ハ一味の法僧ハ一人も
仏まし彼ら上ハ太百万石の中妻子を養ふられ何ぞ御法家の十五万石と出来候
有らる彼よ此物無有て彼ら在し就く惜んで西由をとり幽暗の仔細微のごとくハ
へ大不義の心を起しかくなりれハ一念の誤りハ悔めたにさるまじき事不義の起
る今昔験の依て別りし初めハ家を旅して此獄家にて彼ら在しと云家をなして
申されれハ良清まで妻細をとらへて是ハ永き此衆云是追の行跡存念誤り入てはこ
此上ハ何分に我此者ども彼ら在しこの桃源しまて田純安楽仕り弥よ備へ于於
と申しあて退出れ

良清まことに厳に吉谷佐右衛門諫云ことの
深く耕し浅く種れたる様天良有乞れを利として人を損せハ豈果報あらんや
古賢の有言ありけり良清まで吉保権柄をもて万民を悩め身の後栄を寵人ども
義非人の悪心天道是を悩ミなひて於らん経深の身とも成し家に吉保の
よ吉谷佐右衛門と云ふ者ら一人吉保柳沢に仕へ云百石を領表たし時々陸従しと云へ

爰ぶを循ひ使うも正直案内立ハ出方作る厳道まちも美蘭やら循ひやら仕ども
主人まて坊能しろ主人の身に立身の上ハ家来ぞ義まへまよ家来ぬれと四功之深て
佐右衛門ハ良清まで用人をとそ勧めら此者元家来生而しらん学ひはするのそかく
て一文不通の者ぞかれたるの理を能弁へ所云云又りに良清まに諫云を申せん遠慮
られて二云まも及いん心まいらみ果白此程ハ無くぬれと差居て云へきう詞を知まで
主君ハ安念よ思ひて目をかけし何とそ諫云をなして主人の心根を改めまいハ柳沢の家
此滅亡をとるまじと忠義の余りに存付し語りてハ身を捨かれ良清まで吉保ハ升保
恵兵の屈強か侮りあつと思ひたるハ我此年月工夫と深思し了九を参入に接んも
本意あさいすん気やせん角やく案し煩ひて躊躇しあて振られし夫を見合せ候
弥陀の本像よ珠数を持せて存命是を出候んと備よとと云られハ良清まで驚く打添
め是ハ持て飾りたる仏よまおれ何をかと語らしろよ云ふるそとし微笑して申さる
を佐右衛門取ら去れハ此仏の珠数を爪探立まれよ此心の什中きまされや嫌よ厳の次
今此の心底と此本仏の弥陀仏の儀を何知をよう珠数ハ仏を念して手仏よ成らん近の念珠之
此衆に此本像ハ信実阿弥陀如来て云仏ありかりて未前慮の珠数を取られ家を
あるしきの心ハ何とも笑ふ者ハ愚かなもやし私こそ久しく此年是云を仕らて度のわうりを続くね

振中之條ら百の振候今有上ちみひ今於の方不て之人此列を元ちみひ甲列うて
一回一城北そ成くせちみひ之ちみひ多ハ神九信て回すかすこハちみひ之ちみひ大名
元ち大九ちみひ衛を統行のちみひ心ちみひ仰せちみひハちみひ上ハ此仰分北百北町
人此家中の去元近にハ信をちみひる甲賀ちみひ元方をき
に此自分半の策策と思方有ちみひうちみひ今治を積てちみひ北若しことちみひ顧
りみひを大此上ちみひ百方ちみひお紙とやちみひ進欲心と営ハちみひ後箱
北百六十後れちみひ此心ちみひまりにそれちみひ病ちみひ乱ちみひ佛ちみひ成て振ちみひう
くちみひ教ちみひ元操りやちみひに遠ハちみひ之ちみひ人北諫教の心ハ病ちみひ元ちみひ乱ちみひ
成ちみひ後ちみひ仰せちみひ常前の程ちみひ物に合ちみひ後独ちみひ海ちみひ
法ちみひ食ちみひ要の原北ちみひうちみひれハ云院ん相ちみひ近代信ちみひ
熙ちみひて其方ちみひ孫のちみひくちみひ百方ちみひ此墨ちみひ之ちみひ井ちみひ
垂ちみひ北孫云ちみひられしちみひも其方ちみひ心ちみひ思ちみひ
せん病殉死ちみひもせんちみひられちみひと近代殉死ハ此停心北条月ちみひれハ今後ちみひ
身ちみひ成て常憲院殿ちみひ此菩提ちみひ為ちみひ
此ちみひ佛ハ新佛成ちみひと云ちみひうちみひ此ちみひ深ちみひき心ちみひ
安心佛ちみひ帝ちみひせんちみひと云ハ佛ちみひ前ちみひ之ちみひ
ちみひる為ハちみひうちみひ方ちみひ仕合ちみひと孫百せちみひ

松平伊勢守吉望此両之ちみひ
孫ハ心の他ちみひて上ちみひ人ちみひ下廣人ちみひ
り帰ちみひ去ハ勝安北時ちみひ其虚実自ちみひ
此世のちみひ始ハ此無隙深くちみひ身持ちみひ
せちみひを其ちみひう此沢ちみひ其逆ちみひう其ちみひ
病ちみひ身ちみひ好ちみひ石忠石武云孫道ちみひ
候ちみひ此而ちみひ有て孫十九方石近而ちみひ
ちみひ再任ちみひし友信北信ちみひ此ちみひ
ちみひう此家門前ちみひ寄ちみひ当ちみひ
ハちみひ下ハちみひ外従ひ其余ちみひ
集ちみひ祭日ちみひに孫ちみひ
ハちみひや小此ちみひ
ちみひ

古今の恥を知り自切腹して子孫の恥辱を雪るより謀叛の統領たる天法寺
吉保ハ齢六十に余りて皺腹さへ切兼て弥人の悪口雑説ニ合殺逢人と讒言せ
られ万人ニ疎まれ恥しめらるる歳有て道知る者ハ必羨みとや言方なさに役を剃
保山入道と改名し替名してこそ居たりける誠ニ世ニ有時ハ花鏡の雪を羨
て大虚ニ蟠屈するごとく三度人を噴唖と振りし賄賂の君と呼れし横勢
も威光消ぬれハ窮鳥の翅を刎れて羅網ニ縈纏せらるに似たり今近衛西
尚りし大谷殿公家ニ而て富士の根の鞍ヶ岳なる者なれとも猶ハ云へ尚公方家宣
卿ハ御慈悲深く寛に大度の大将ニて渡らせ給ふ政務ニ御賢慮を巡らせ給ふ上
前将軍の御為ニ付ひ御親しき吉保が義なれハ切腹ゟ又ハ改易なとやなんも今
ニ而に其志と百万石の折紙を下され御父の家跡絶ぬ御用捨ありしも本
領の代となりんとす高生安定なりしといへ九若君の御在流にても有なハ本
高ニハ更に用捨へ其の御恵にて列吉保入道ゟ世嗣ニ仰付られ知行十五万石ニ都合
八十八万石ニ甲府の城を御遣なく相続仕る旨ニ厳命有此経代元抜兵松
平伊勢守吉里とこそ号しける依て又吉保か嫡子形ハ備保通次男経隆
備時睦にも越後の黒川と三日市とを在所として知行壱万石宛を下し置れ

なる事や柳沢の家を永絶仰付られなハ自他合戦の基となるすなはちやせんハ家宣
公の御裁判寛仁大度の御政ぞ有難かりし次第也

家宣公御治世并天下泰平繁栄の事

鳳凰治世の遊楽を囀り百僚會盟の幕下にハ蛟龍頭りに恭平を吟じたる
や抑も大納言家宣公宝永六年の四月に正二位内大臣右近衛の大将ニ昇進
有征夷大将軍淳和奨学両院の別当を兼帯有源氏長者公方の高職ニ
補し給ふ同年十一月二日ニ西ノ丸より本丸ヘ御移徙成らせ給ふ誠ニ本朝ハ天照皇
大神より今年迄二百三十三万六千三百四年に成東照大権現家康公杯年の
天下の御創元和元年乙卯より今宝永六己丑まで年暦九十五年ニ成る
此の太平に相続て将軍五代の松ハ久堅御富士を常盤の蓬莱山と御める家門
の末に武蔵野の満月を外天の光ニ同し紅葉山の本末千秋の色を並し
万里の海ハ漣静かに濆る江府の繁昌有難や嬉しやと万人の悦ふ声
天下泰平治る御代の座弁に入て侍と云へハ其のつる恵蔵の我家を誇らさせ給ふそ
有る所の事なりとれハ彼恵蔵ハ社稷の中に入らせ給ふ果東雲も明渡り
柳ハ青く梅白く天下泰平ハ神前ニ時を梅に歳栄て松枝を鳴して居たり

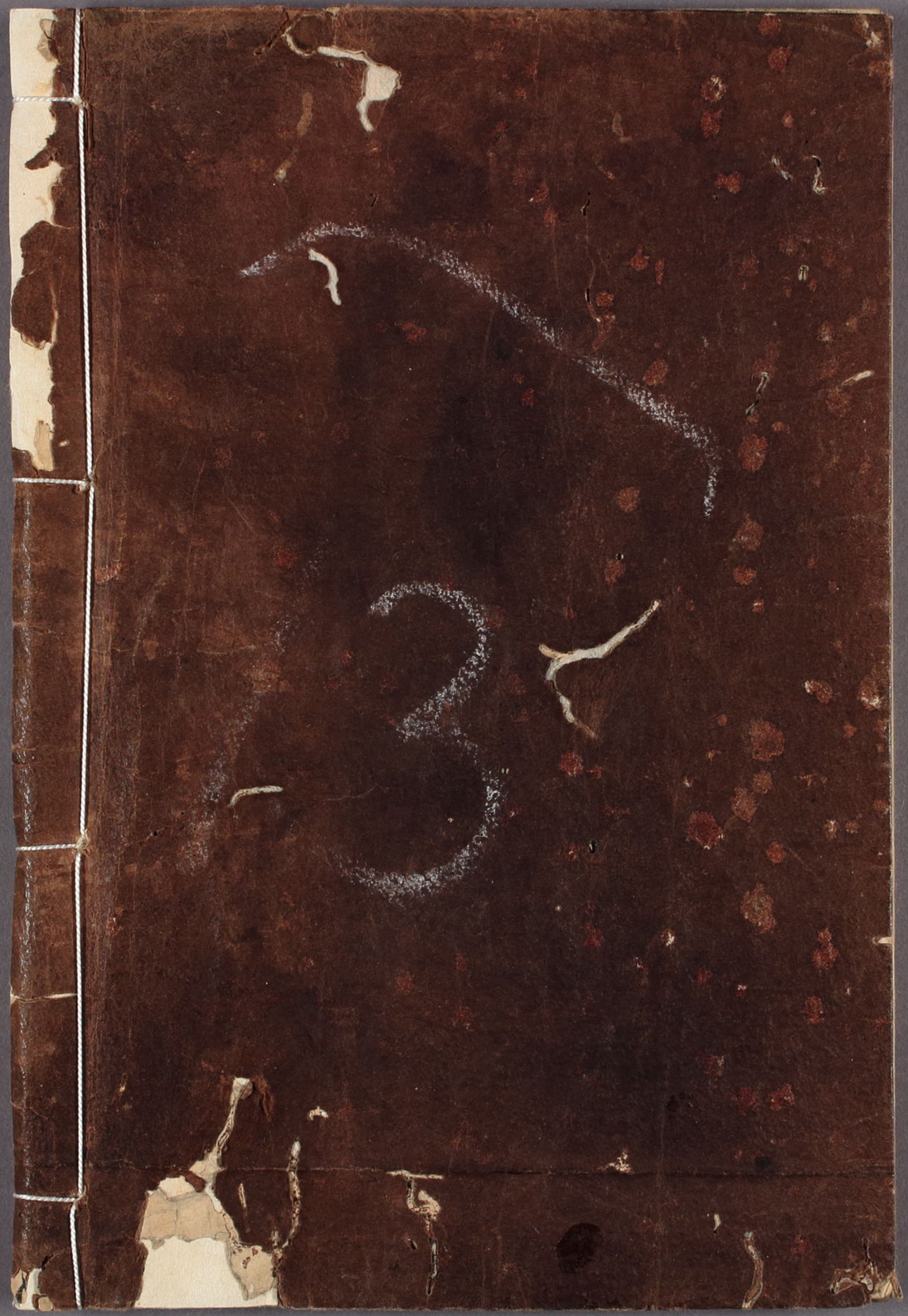
しかれも吹かぬ神前の久数傾きし常灯明発と消なるゆへにて最と
心ハ細々と日光山を立かて伝流丞苦光寺に請ひて夫分伊勢の内分の宮
へ余宮し八鬼山を越て熊地二三所権現を礼なし其に西国三十三所の観世
音北雲場を巡礼し更流北谷波寺分本首路を絶上別当諸北栄居の庵に
隠り世上北噂を笑ハ将軍綱吉公ハ正月十日に御薬去在ませしとて鳴物停止
を解なる故拠にて日光権現の御告有しと只合せ主税ハ泣く老母妻子に暇
乞し後十文字に拠切て殉死志なるを勇健なれ此度将軍 家宣公の御上
聞に達しかハ命ハ捨難き拘成を不便なるとも奇特成事なれと御褒美の御
上意有しかと去なるから武目を背志之と御心の付かせられたる御一云にて荒川
太作等と矢木主税か和に殉死志なる者も多りなる三年も過こしかハ太作等、
と矢木か子先と百かされんとの御内存之とかや誠に此両人ハ跡々の事とも接続
御家目を背さて殉死せるハ天晴忠臣とや云ん然ハ士とやせん中にも主税ハ其身
猿楽の家よりおこれ先歴々北大名にも増りたる心根之と世上に当て流布せし
義夏の中の夏なれハ主税ハ国に汗を流し拘く夏の中に日光山へ来詣りも然
大権現北来社の老翁に遂まりて新た成夏北苦を象り数年来の事を見に見

て其夏覚て諸国を巡りて後居所に隠りて 綱吉公北御当忍を被せん病ひ死せ
しと思ひしも夏にて有なるかと侍を見れハ過しに既に其綱吉公に報ひ申し 権
なり呼と感心志て押戴き是を日光邦鄭北権と名付て一生秘蔵して終りなる
日光邦鄭之権巻之下大尾

紙数百十八枚

芸狭國酒井家臣　河上吉次判

樋口氏蔵書

此日光邦鄭権一冊嘉永二巳酉年五月中旬樋口氏より借用同月廿七日写年
江戸平也伝

紙数六十五枚　奥津喜楽夏原長高